
電腦コイル プロローグ

此花耀文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳コイル プロローグ

【Nコード】

N3469J

【作者名】

此花耀文

【あらすじ】

2025年、夏。

アッチへの通路を開くため、イサコと猫目は最後のキラバグを手に入れようとしていた。一方そんなことは露知らず夏休みを謳歌するフミエとダイチ、自由研究にいそしむハラケン。それぞれの日々は、1人の少女、葦原かなを巡って「その時」へとつながっていく。

序章 牧神の目覚め（前書き）

本作は、この「小説家になろう」で「電脳コイル『春』」を連載中の川島奏さんのアイデアをお借りし、多々のご協力を頂きながらここまでこぎつけたものです。

投稿にあたって、改めて川島さんにお礼を申し上げます。

序章 牧神の目覚め

薄暮がある。

光は私たちの愚かさを無残に照らし出すから私たちはそれに耐えられない。

闇は私たちの醜さを膨らませて腐らすから私たちはそれに耐えられない。

それで薄暮だけがある。始まりもなく終わりもないこの場所です。一ロウのように無限に広がる薄明かりを見上げながらたたずんでみると、その綾なす彩りのあまりの美しさに何かが麻痺してきて、この景色は今私が見ているものなのか、過去の想い出なのか、未来の予感なのかだんだんわからなくなる。

私はこの場所を守らなくてはいけない、この場所を守って欲しいと願った人間のために。ここが世界で一番美しい場所だと心の底で知っていてここに帰ってきたがっている子供のために。私は私とこの場所と私の愛する子供たちとここで共に永遠であるために生まれたのだから。

声が聞こえる。それで私は目を覚ます。小さな子供の泣き声。まだ小学校に上がったばかりくらい。長い髪を両側で結わえておさげにしている。意志の強さをあらわしてか少しだけ険を持った目も普段はへの字に結ばれた口も、今は頼る方なく涙に汚れている。道に迷ってしまったらしい。

なんて愚かなんだろう。私は起き上がる。道は一本だけしかないのだから迷うわけがないのに。でもその愚かさが私にはいとおしい。立ってあたりを見渡せば、今日は一面のすすき野原だ。私が目を覚ます度、この場所は誰かの想い出によって姿を変える。

ほとんど色を失った残照のためにすすきは微かな風にやわやわとそよぎながら追憶の灰色につかっている。とても良い。これはおジジと鹿屋野神社にお参りした後で並んで歩いた道だろうか、それともお兄ちゃんと初めて河原に降りた時抱っこされて見た景色だろうか、それとも全然違う誰かの風景かな。色味のないすすきは一見冷たく弱々しいが本当はしつとりと落ち着いた空気と一緒に今日の世界そのものを支えていて、だからその主祭である私に微笑む。

私は世界に微笑み返してから女の子の前に歩み出る。

彼女は突然現れた私に驚いて2、3歩後ずさるが、私の差し出した手を見てすぐに嬉しそうな表情を浮かべ、駆け寄ってくる。そう、偉いわ。そのまま来なさい。来たらあなたの欲しがってたものみんなあげる。女の子の顔が上気する。紅葉のような手が私に触れそうになる。

でも、届かない。もう少しのところで女の子の姿は遠ざかり始める。彼女の口が動いて言葉を作っている。待つて、と言っているつもりだろう。だがそれはもう世界から離れてしまっている。やがて女の子の姿は点のように小さくなって消え、すすきたちにも眠りが訪れる。

影を作らないうす明りの中で私は思いに沈む。

今日も駄目だった。同じことをもうどれだけ繰り返したことが。

坂道の上で、商店の建ち並ぶ街頭で、縁日の雑踏の中で。取り残される不安の視線だけを残して、いつも彼女は戻っていく。

だが、もうすぐだ。私と彼女を隔てる距離は確実に縮まってきている。後もう一つ、私があの世界に残してきた欠片を手に入れれば、彼女の手は私に届く。そうすれば、彼女は全てのくびきを逃れて自由になる。

そして私は時を止める。なぜなら彼女が自由になった瞬間こそが一番美しいから。

世界は静止して、私は私とこの場所と私の愛する子供たちとここ

で共に永遠となる。

その日はまじくまじくあつあつする。

第1章 夏がやってくる

うだるような暑さに耐えかねてわずかな日陰から日陰へとろのろ歩いている大人たちが、商店街をまっしぐらに駆け抜ける私に驚きの視線を向けた。

夏がやってくる。

8月も半ばにさしかかろうというこの時期の言葉じゃないけれど、私にとって待ちに待った夏は、もう後ほんのちよつとのところにあつた。

この4年間、私ははつきりと季節を感じたことがない。年月はつかみどころなくぼうつと流れていって、私は与えられた服を着るように淡々と日々を繰り返した。

わかっている、そこには足りないものがある。やれ暑い寒いのも、雪が降ったの花が咲いたのと一喜一憂しているクラスメイトをうらやましいと思ったことが1度もないと言ったら嘘だ。けれど彼らに加わろうと試してみたところで、薄膜1枚隔てた向こうの楽しげな息吹にどうしても届かず、私はいつも取り残される。

だが私は自分が不幸だなんて思っていない。これは罰なのだから、あの時私だけがここに残ったことへの。どこかで寂しさに耐えているに違いないお兄ちゃんと同じ感情を味わえるのなら、この痛みもむしろいい。

でも、そんな苦しみとももう別れの時だ。私を覆っていた膜は優しい手で払いのけられて、そうして私たちは2人で暑い夏を感じる。もうすぐ、もうすぐ会える。

お兄ちゃんが帰ってくる！

ふいに甲高い着信音が鳴り響いた。それまでの全力疾走を小走りに切り替えて、私は電話に出た。

「はい、私」

「勇子か。僕だ、宗助だ。目標の地点までどのくらいで着きそうだ？」

電話の向こうからいつもと変わらない冷静な声が響いてくる。

「もう近くまで来てる。後5分くらいかな」

「うまいぞ。空間の乱れはまだしばらく続くはずだ。絶好のチャンスだ、頑張れ、勇子」

「ありがとう。今回は準備もしっかりできてるし、決めてみせるわ。自分にも言い聞かせるつもりで、力を込めて答える。

「ははは、頼もしいな。もし今日うまくいったら　そうだな、3日後、13日には僕も大黒に行く。その時に通路を開く暗号式を教えてあげよう。すぐにアッチとつながるはずだ」

「そんなに早く……わかった。絶対成功させるから、見せて」

バラ色の未来っていうのは物の例えかと思っていたけど、見たままのことなんだとわかった。目に映る何もかもが明るく輝いている。「見ててと言われてもそっちに行くことはできないけど、成功を祈ってるよ。それじゃ、切るぞ。イリーガルを捕獲できたら連絡してくれ」

「うん、じゃあまた」

電話を切つてすぐ、前のほうに目的地が見えた。少し古びた神社だ。数段の低い石段の先に鳥居、それより奥まった向こう側に社殿が見える。

鳥居をくぐると、気温が下がるのがわかった。立ち並ぶ木々の枝葉が日光を遮っているせいだ。汗がすつと引いて、気持ちが引き締まってくる。

イリーガルの呼びやすさはこの神社の境内ならどこでも同程度だと宗助は言っていた。それならなるべく人目につかないところの方がいい。見回すと、社殿の横に程よいスペースがある。ここなら外から見えないし、誰か来ても建物の裏手に隠れられる。

近寄つてイリーガルを呼び出すための暗号式を書く余裕があるか確かめた。一部が社殿の前まではみ出してしまおうが、まあ十分だろ

う。私はすぐに作業に入った。

20分後、完成した暗号式は私の前で薄青い光を放ち始めた。この作成時間はこれまでのベストタイムだ。大丈夫、うまくいく。そう思いながら暗号式の中心を見つめた瞬間、黒いかたまりが地面からずると持ち上がってくるのが目に入った。罠に使ったハムスター型のペットマトンがちーちーと騒ぎ出す。

「いいぞ！」

思わず声が漏れる。こんなに早く捕まえられるとは。今日は全てがうまくいく。

現れたのがキラバグを持った型イリーガルであることを確認して次の手順に移ろうとした時、鳥居の外から子供の争うような声が聞こえてきた。

「ちよつとダイチ、返しなさいよ私のノート」

「うるせー。お前がどんな自由研究やってるかおれ様が確かめてやるうって言うてんだろ。ありがたく思え」

声はそのまま近づいてくる。男女2人のようだ。私は素早く身を隠した。

「こらっ、見んな！ あんたなんかに見られたら字が腐るわ」

「なにいつ！？ この清潔なおれ様のどこ見て言っただやがる」

「頭よ。あんたの頭の中腐りきってるじゃない」

落ち着け、暗号式は結界にもなっている。イリーガルは逃げられない。境内で騒いでいる馬鹿が消えてから、ゆっくり続きをすませればいい。

「な……こんのやるー、そう言うお前はどんな高級な頭してんだ。よし、今ここで確かめてやる」

「あーっ、やめてったら！」

「なんだ、何も書いてねえじゃんか。ぶっ、フミエ様の頭の中はすっからかんですか？」

「許さん、もうあったま来た……その記憶ごと消去してくれる！」

エメラルドの光が走るのが垣間見えた。なんだ、あれは？ まさか暗号？ 私は社殿から身を乗り出した。

「やめろ、危ねえ！ ぎゃっ！」

デバイスの一部が破壊されたらしく、光線の当たった男子の体が文字化けした。やはり攻撃型の暗号に近いものか。　　ということはずい！

振り返った瞬間、女子の乱射した光線が暗号式に当たって、式が壊れた。閉じ込められていた結界が消えたせいで、イリーガルがひよこひよこといびつな、しかし意外と素早い動きで逃げていく。くそっ、あとちよつとのところだ！ 慌ててペットマトンを拾い上げ、次にイリーガルの動きを止める暗号を放とうとした。

「わっ！？」目の前の画像がぐしゃぐしゃに乱れて、私は無様に地面に転がった。光線が頭に命中したらしい。

「あれ、誰かいた？ ダイチ、今女の子見えなかった？」
「やめろ、来るな！」

「知らねえよ、そんなもん！ へっ、こんな白紙ノート誰が見るか」
「あつ待て、逃げんな！」

念じた甲斐あってか、騒々しい足音と共に声が遠ざかっていく。画像の乱れも直ってきて、私は立ち上がった。イリーガルの姿はどこにも見えない。

あいつら、次に会ったらただじゃおかない。心の中で悪態をついた。でもよく考えると、まともに顔も見えないのに会ったってわかるはずがない。

「くそ！」

今度は声に出して、足元の石ころを思い切り蹴飛ばした。

どうやらあいつらにツキを持ってかれたようだ。

宗助にイリーガルを取り逃したと伝えると、手のひらを返したように冷たい声で10分間うじうじとお説教を食らった。時間がないと散々言い聞かせてようやく解放され、捜索用にモジヨを呼んだの

はいいが、1匹ダウンロードエラーでフリーズしてしまい修復に手間取った。その後も転んだ拍子にカプセルが開いてペットマトンに逃げられそうになったり、やっと見つけたイリーガルが子供に追いかけられてまたどこかに行ってしまうたり、想像し得る最悪のパターンをなぞっている。

そろそろタイムリミットだ。私は時計を見た。イリーガルを呼び寄せてからかなりの時間が過ぎてしまっている。もうすぐイリーガルは消えてしまうだろう。せっかくここまで来たのに……お兄ちゃん。

押し寄せる失望感に抗っていたせいで、着信に気が付くのが遅れた。モジヨからの連絡だ。

「見つけたか！」

モジヨの位置はこの近くの交差点……？ 急に画像が乱れ、通信が途絶える。と、すぐにまたつながったが、今度は妙に画質が粗い。通信状態がかなり悪い。

まあいい、とにかく急がなくては。私は走り出した。

交差点に着くと、モジヨたちがイリーガルを囲んで輪になっているのが見えた。イリーガルが踏み出そうとするとモジヨは足元を狙って攻撃し、牽制している。下手に体に当たると崩壊が早まってしまうからだ。

イリーガルは弱っている。多少の人目があるが、ここはいつも通信状態が悪いのだろう、メガネを掛けた人間は見当たらない。ここでペットに移すしかない。

すぐそばまで寄ってからカプセルを地面に置き、蓋を取った。体と耳を伏せて警戒しているハムスター 絶好の避難場所に気が付いて、イリーガルはじりじりと近付く。ハムスターは次第に追い詰められる。距離が詰まっていく。

逃げ場がなくなったハムスターがぱつと身をひるがえした。マトンとは言え野性を感じさせる鮮やかさだ。だが、一瞬早くイリーガ

ルが跳びかかっていた。

私はほっとして汗をぬぐった。イリーガルの大きな図体がみるみるハムスターの体に吞まれていく。後はどこかこいつが安定できる空間で取り出して、キラバグを回収すればいい。ぐったりしたハムスターをカプセルに入れ、宗助の番号に電話した。が、つながらない。

そうか、ここじゃ駄目だった。電話を切って立ち上がった私の目に、こちらを向いた人影が映った。

「この辺りは電波状態が悪いから、場所を変えたほうがいいわよ」おっとりして気の弱そうな感じの女子だ。私と同年くらいだろうか。メガネは……掛けている。咄嗟にカプセルを背中に回す。

「そうね、ありがとう。どこか別のところに行くわ」取り繕って立ち去ろうとした後ろ姿に声がかかった。

「ねえ、それ、あの黒いの？ あなた、もしかしてクロエの居場所を知ってるんじゃない？」

「クロエ？ 何のこと？」

「こいつ、なんだ？ 私のことを見てたのか？」

「嘘。じゃあその中身は？」

「これは私のペット。逃げ出してしまったのをやっと見つけたんだ」私は彼女にカプセルの中身を見せた。ハムスターが横たわっているだけだ。

「ほんとに？ それならあつちのは何？」

「モジョツ！？」

指差されたモジョが体を伸ばして気を付けする。馬鹿、任務が終わったら早く帰れ。ぎろりと睨みつけると、引っ張られたみたいに震え上がってから、あたふたとわき道に消えた。

「知らない。どこかの逃げ出したペットでしょ」

「あなた今目配せしてた」

「知らないったら」

外見に似合わずしぶとい子だ。

「ふうん。……じゃあこの子の名前は？」

彼女は今度は私の抱えているカプセルを指す。

「えっ、うん……えーと」

「ほら、言えないじゃない」

「ど、度忘れしただけ。こいつは ヤサコ」

「ヤサコ？ 変な名前」

本当に変な名前だ。なんで思いついたんだろう。

「カンナ、どうしたの？」

頭越しに突然声がした。ひよろりと背の高い男子。やっぱり私と同学年くらいに見えるから、カンナと呼ばれた目の前の子のクラスメイトかもしれない。

「あっケンイチ、今この子と話してたの。イリーガルのこと知ってるみたい」

イリーガル。どうしてこいつらがイリーガルのことを？ 疑問が頭をもたげたが、今はかまってる場合じゃない。

「そんなもの知らないわ。私はペットを探しに来たの。あんた、友達？ この子さつきからしつこいんだけど」

「ごめん。カンナ、知らない子にまで迷惑かけちゃ駄目だよ」

「違うのよ。絶対何か隠してるもの」

「私もう行くから。じゃあね」

言い争いを始めた2人を放って、私は歩き出した。

「待って。クロエのこと教えてよ」

「カンナ！」

振り向くと、私を追いかけようとするカンナをもう一方の男子、ケンイチが止めている。

「クロエなんて聞いたことないわ！ バイバイ」

捨て台詞を残して、私は角を曲がった。

2人の姿と、その後ろの夕焼けが見えなくなった。

第2章 野の語ること

校舎を出ると、かっと思い夏の日差しが降り注いだ。

あれ、「暑い」じゃなくて「熱い」かな？ 授業では確か気温なんかの場合は「暑い」だって教わったけど、このちりつとくるような日光はじかに「熱い」。けれど日記に「今日は熱かった」って書いたら先生の赤ペンが入るだろうな。うん、「暑い」が正しい。でも待てよ、そう考えると実験でやった太陽光で作る目玉焼きも「暑い」はずだ。そうするとあれは「暑ちっ」とか言って食べるのが正しいってこと？ うーん、よくわからなくなってきた。まあいいや、どっちでも。目玉焼きは冷ましてから食べればいい。それより残り半分の夏休みをエンジョイしなくては。

そう、夏休みは楽しい。楽しいけれど、あまり長く続けるとだんだんありがたみがなくなつて「退屈な日常」になつてしまつから、登校日っていうのはいいアクセントだ。どうせ授業はないし、午前だけで終わりだし、しばらくぶりに揃つたみんなの顔を眺めるのも悪くない。

ただし、登校日だからつてそれまでのペースをいきなり変えられるものじゃない。むしろすまして早起きしてるアキラのほうが優等生みたいで気持ち悪い。アキラのやつムカつくわ、弟のくせに。慌てる私を影で笑つてたのもちゃんと知ってるんだから。

ま、今朝の「ご飯の中にいちごジャム」はかなり効いたようだ。お箸投げ出して「ぎゃーっ」て叫んでたもんね。ちなみにこれは復讐ではなく、血糖値の足りないもやしみたいなの弟への姉としての温かい配慮だ。

……えーと、私何考えてたんだっけ。

「フミエちゃん」

急に名前を呼ばれて私は振り向いた。

「ああカンナか、ひさしぶりね。今日はハラケンと一緒にじゃないの

「？」

「う、うん」

カンナは少しもじもじしながら言った。

「ねえ、一緒に帰らない？」

「え？ そんなこと言ったって、帰る方向が全然が違っじゃない」

「そうだけど……それなら校門まで」

話したいことがあるみたいだ。これはいい機会かも。

カンナは前からおとなしい子だったけど、しばらく前に飼っていた電腦ペットを亡くしてからますます口数が少なくなった。時間が経ったら元に戻るだろうと思っていたのに、身にまとわりついた寂しさがなかなか消えなくて、最近は少し心配になってきてたところだ。

「校門なんて目の前じゃない。私、そろそろメガシ屋に行こうと思っってたんだ。それならカンナの家と同じ方角だから、途中まで一緒に行こう」

「うん」

カンナは少し安心したように笑った。

「それで、用件は何？」

歩き出してすぐに私は聞いた。

「え、用件って」

戸惑った声が返ってくる。

「何か相談でもあるんでしょ。それで私に声かけたんじゃないの？」

「……」

カンナは言い淀んでなかなか喋らない。待たされて少しいらいらしてくる。私ちよつと短気なのかな。いやそんなことない、カンナが気長なんだ。でもハラケンもカンナと同じくらいだな。そう言えばお母さんも「あんたは気が短すぎんよ。よく考えてから行動しなさい」って怒る。何言ってるの、私はこんなにいろいろ考えてるのに。

まあお母さんが怒るのは仕方ないとしても、アキラのやつそういう時に限ってお母さんの後ろから「そうそう、お姉ちゃんもっと論理的な思考をしたほうがいいよ」とか余計なことばかり喋って1人じゃ何もできないくせにあのふんどし担ぎ。

あれ、この場合「ふんどし担ぎ」って正しいんだっけ？ これって確か「下っぱ」って意味だね。アキラは確かに最下層の奴隷階級だけど、今の使い方は違うような気がする。なんかことわざがあったような……うーん、思い出せない。まあいいか、なんだった。きょう日ふんどしなんてお相撲さんしか締めないし。

「……だから、昨日のその子のこと研一と口喧嘩みたいになっちゃったの。私が悪いのかな。フミエちゃん、どう思う？」
突然問いかけられて私はどきまぎした。

「は？ ええ、ああ、うん、そう、カンナの思ったとおりよ」

「あ、やっぱりそうなんだ。私が悪かったのね」

よくわからないけどカンナは急に打ちしおれてしまった。

「ち、違うよ、カンナが正しいって意味でそう言ったの。落ち込むことないわよ」

「本当？」

「ほんとほんと」

私は苦しい笑いを浮かべる。

「そうよね。あの子怪しかったもの。でも見たことのない子だったわ、ツインテールなんて」

「ツインテール？」

そんな子を最近どこかで見かけた気がする。考え込みかけて、すぐにはっとして止めた。いかん、カンナの話が聞かなくちゃ。

「でもどうしよう、自由研究」

「カンナのクラスも自由研究の宿題出てるんだ。どんなテーマにしたの？」

「イリーガルの研究。フミエちゃんは？」

「え、私!? 私はその、あれだ、ダイチがノート取って、ほらあ

いつ腦みそ腐ってるから。それでまだ真っ白で

「それ、何の話？」

いぶかしげな視線が私をたじろがせる。

「むぐぐ、だから、みそ……腐る……白い……そうよ、豆腐よ！」

「えっ、お豆腐!？」

カンナの目が丸くなった。

「そう、豆腐の研究。科学的にね。豆腐はどうやって作られるのか、何故豆乳が固まるのか。木綿と絹とどっちがおいしいか、薬味はねぎか生姜か。味噌汁に入れるとちよつと苦いような気がするけれどあれは私だけなのか、特に木綿」

「すごいわフミエちゃん。授業で学んだ知識を使って身近なことを調べてみましょう、って先生が言っていたとおりだわ」

「いやははは、それほどでもないわよ」

私の笑いは引きつっていた。まあ「ふんどのしの研究」なんて口走らなかつただけですか。

「私の研究はいいのよ。問題はあなたのほうでしょ」

「そうだったわ。実はね、自由研究自体は進んでるの」

「そうなの？ なら問題ないじゃない」

カンナは電腦にはあまり詳しくなさそうだったから、それで困ってるのかと思っていた。

「そうじゃなくて、クロエのことで研一が あっ、もう着いちゃった」

道路の端を見上げる顔に知られて振り仰ぐと、解体中の家屋の向こうに古い木造の建物があった。メガシ屋だ。

残念そうなカンナ。もう、仕方ないな。

「じゃあさ、私買い物してるから、その間にランドセル置いてきなよ。ここで待つてる」

「いいの？ ありがとう」

カンナはくるつと向き直って走り出した。

「ちよつと、車に気をつけなよ」

やれやれ。カンナは結構子供っぽい時がある。

子供っぽいと言えば、今日の「夏休み子供スペシャル」見らんないなあ。『超兵器R62号の発明』ってなんかすごいタイトルで楽しみだったのに。きつと夢みたいいな新兵器で敵の本拠地をどかーんと爆発させる話だろうな。

おっと、また余計なこと考えてた。私はメガシ屋の石段を上った。

「くっださいいな」

薄暗い店内に向かって声を張る。すぐに奥から人影が出てきた。

「おおフミちゃんか、しばらく見ない間に大きくなつたの」

「やだメガばあつたら、ほんの1週間くらいでしょ」

「そうじゃったかの。それで今日は何がご入用じゃ？」

聞かれて私は考える。昨日ダイチに使いまくつたからメガビーが切れかけている。ついでだから壁も買つとくか。

「メガビー20秒とレンガ壁10枚ちょうだい。後ジュース2本」

「はい、しめて800万円」

「メガばあのアイテムはネットなんかよりぐんと安いから助かるわ」

「質もいいぞい、なんたつてわしのお手製じゃからの。じゃが、最近メタバグの量が減ってきたみたいじゃ。相場が上がったら、そのうち値上げするかもしれんのう」

「そんなこと言ってたくさん買わせようつたつて引っかかりませんからね」

お金を払って、ジュースを1口飲んだ。自販機のもいいけど、この瓶のジュースはなんか情緒って言うのか、いかにも駄菓子屋って気分がして悪くない。

「待ち合わせしてるんだけどもう少しここにいてもいい？」

「ああ構わんよ。わしもフミちゃんみたいいなピチピチギヤルがいると若返るわい」

「……死語？」

あんまりメガばあの近くにいとボキャブラリーが変になるかもし

れない。気をつけよう。

「話が変わるけど、お隣、引越したの？ 取り壊してるみたいね」「そうじゃ。実はの、その土地、息子夫婦が買い取って新しく家を建てるんじゃないよ。そうしたら孫娘も来るじゃろうから、フミちゃん クラスメイトになるかももの」

「へえ、メガばあつてお孫さんがいたんだ」

「一体どんな子なんだろう。メガばあみたいにがめついのかな。いやいや案外おっとりしてるかも、リボンタイなんかしちゃって。いくらなんでもそれはないか。」

「フミエちゃん、お待たせ」

「カンナがやってきた。ずつと駆け通しだったのか、肩で息をしている。」

「もう、そんなに急がなくてもいいのに。メガばあ、じゃあまた今度」

「毎度あり、じゃ」

メガシ屋を出てすぐ近くの小さな神社に入った。ベンチに座って、カンナにジュースを渡す。カンナは最初遠慮していたが、ジュースの瓶を無理に握らせると、走ってきたせいで喉が渴いたのか「ありがとう」と言つて一気に全部飲み干した。

「でも次は私がおごるからね」

「わかったわよ。じゃ、約束ね」

「うん」

2人で笑い顔を見合わせる。ああ楽しいなあ、夏休み。ランドセルを脇に置いて私はベンチに寝転がった。

「そろそろ、さっきの続きを話してもいいかしら」

「カンナが遠慮がちに言った。空があんまり眩しいから影になったカンナの顔つきはよくわからない。」

「もちろん。そのために来たんでしょ」

「起き上がるうとしたけれど、肩を押さえられた。」

「そのままでもいいわよ。面と向かってだと、ちょっと話じづらいし」
「そう、ならいいけど。クロ……自由研究の話だったわよね」
しまった。

「気を遣ってくれなくてもいいの。そう、クロエの話。あのね、クロエにもう1度会えるかもしれない」

「えっ、でもクロエは……」

「そう、死んじゃった。でもね、私クロエの声を聞いたの。掲示板の書き込みで声を辿っていったら願いがかなうって聞かされて、研一はそんなことあるわけないって言うけど試してみたら本当に霧が出てきてイリーガルみたいな黒いのが現れて、その時に聞こえたの。クロエの鳴き声が」

私は痛々しいような気分になった。

カンナの言っていることはめっちゃくちゃだ。ペットを失ったショックが大きくて、そんな夢に頼ろうとしてるんだ。

ゆっくり体を起こして、カンナの隣に座りなおした。

「カンナさ」

「わかってる、私の話が夢物語だって言うんでしょ。研一も同じだった。自分でも変だと思っもん、こんな話。私だって他の子から聞かされたら、この子おかしいって思うよ」

「……」

「でも聞こえたの。それだけは本当なの。それなのに研一は信じてくれない」

カンナは顔を覆っている。

私はなんて答えればいいんだろう。

クロエはもういない、声っていうのも聞き間違いだ、って？ いつもの私なら絶対にそう言う。ハラケンもそうだったんだろう。でも、それじゃカンナの心の一番大切にしているものには届かない。

……それじゃ、カンナの言葉を信じる、クロエはどこかにいる、って答えるの？ それは嘘だ。下手な調子合わせだ。そんな返事は、カンナを余計に傷つけるだけ。

「ごめん、困らせちゃったよね。いいの、話を聞いてくれただけで
カンナはベンチを立とうとした。」

「待って」

私は呼びとめる。

「カンナの言ったこと、本当かどうか私にはわからない。正直に言
えば信じられない」

「うん……そうだよ」

カンナの小さな肩がますます縮んだように見える。

「だからさ、一緒に確かめに行きましょう」

「えっ」

「ハラケンはどうせ現場を見もしなかったんでしょ。ああいう学者
馬鹿タイプはそこが駄目なのよ。ね、私がついていくからさ」

カンナには自分でお別れを言わせないといけない。私はカンナが逃
げ出さなくなった時にそばにいればいい。

「本当に一緒に来てくれる？」

「もちろん。いつにしようか」

とその時思い出した。明日からお盆で婆ちゃんの家に行くんだっ
た。なんてタイミングの悪さ。

「……ごめん。明日から家族旅行だわ。お盆明けでいいかな」

「うん。じゃあ1週間先の18日でどうかしら」

「オッケー、絶対行く」

ようやくカンナの笑顔が戻った。

「もしフミエちゃんにも聞こえたら、一緒に研一を説得してね」

「そりゃいいけど。それにしてもカンナさつきから何かというとな
ラケンばかりね。こりゃよっぽどのハラケン好きだわ」

カンナは急に真っ赤になってうつむいた。なんだろう、変な子。

妙に思いながらランドセルに伸ばした私の手が空をつかんだ。あ
れっ？

さつきベンチの横に置いたはずのランドセルが歩いていく。いや
ランドセルが歩くわけない、誰かが引つ張ってるんだ。いやいや誰

かじゃない、こんなことするやつは世界に1人しかいない。

「こらダイチ！ あんたどこまで大馬鹿なのよ」

「のわっ、ばれたか。しかしこのランドセルが人質だ。返して欲しい」

「じゃらくさい！」

ビームがダイチの顔を襲う。

「ぐわっ！？ お、おい、しょっぱなからそれはルール違反だろ」

「問答無用！」

「ひい！」

ダイチは裏返った悲鳴を上げてランドセルを放り出した。

「情けないやつね。よし、その根性鍛え直してやるわ」

なんかすつきりしたせい、夏の雲のように闘志がわき上がる。幸いメガビーも補給したばかり。

「どりゃ！」

今度は見事後頭部を直撃する。が、ダイチは文字化けにかまわず必死で逃げていく。

追いかけてようとして急ブレーキをかけ、私はカンナに向かってガッツポーズをしてみせた。

「男なんかつけ上がらせたら駄目よ。そうだ、これあげるわ」

さっき買ったメガビー10秒分をカンナの額に貼りつける。残りは自分に貼った。

「ハラケンがうだうだ言ったらやつつけちゃいなさい！」

「うん、わかった！」

カンナも屈託なく笑っている。

「じゃあお手本！」

振り向きざまにもう1発。よっしゃ、遠距離記録達成！

第3章 森の語ること

「ぬぐわあつ、ブスエのやつ！」

昨日のことを思い出しているうちにふつつつと怒りがたぎってきて、俺は叫んだ。

「やめなよダイチ。こんな街中でみっともないよ」

半歩遅れてついてくるデンパがおどおどあたりを見回した。気の小さいやつ。

「ふんつ、お前なんか俺のこの苦しみがわかってたまるか」

そう言った俺の頭に、またも記憶がよみがえってくる。

「くそつ、お前どこまでしつっこいんだよ」

メガシ屋から1キロ以上全力で走り続けても、フミエは猛牛みみたいな勢いでまだ追いかけてきた。ちくしょう、俺は逃げ足には自信があるのに。そうか、きつとあいつは小さいから走るのにエネルギーが少なくてすむんだ。世の中はなんて不公平なんだ。

ふらふらになりながら角を曲がり、最後の力を振り絞って学校の前をスパートで駆け抜ける。さすがにこれには追いつけなかったか、フミエの姿がだんだん遠のく。

よし、逃げ切った！ 家の門に飛び込もうとした鼻先に、絶望の色をしたレンガが立ちふさがった。

「甘い！ あんたの考えなんてお見通しよ」

腰を抜かして見上げたレンガに小柄な人影が映る。振り向いた瞬間ににんまりと笑うフミエの額からとどめの光線が発射されて、俺のメガネは煙を上げた。

呆然とへたりこんだ俺に向かって、フミエが仁王立ちになる。

「あんた、くだらないちよっかいばかり出して人様に迷惑かけてんじゃないわよ。お子様はさっさと帰って『夏休み子供スペシャル』でも見てなさい。どうせ毎日見てたんでしょ」

「ぐっ」

図星だ。

「ふっ、これだから子供は。私の相手になろうなんて100年早いのよ、精神年齢が」

フミエは見下したような表情を浮かべて悠々と去っていったのだった。

「むぐぐぐ」

またも怒りがぶり返してきた。「夏休み子供スペシャル」を見ていたのは事実だ。だが俺はあんなチビスケに「お子様」なんて言われたくない。だから今日は意地でも見ない。と決めただけ家にといたらだんだん見なくなってきたから、こうしてわざわざ外に出たのだ。

あーあ、『遊星からの物体Xより愛をこめて』って楽しみにしてたのになあ。きつと宇宙人が改心して「共に平和な世界を作ろう」ってハッピーエンドになる話だろうな。

俺はそういうほろりとくる話が結構好きだ。きつと俺に流れる江戸っ子の血がそうさせるのだ。

なんてことを言うときつと俺は江戸っ子じゃないとか突っ込んでくるやつがいるだろう。もちろん俺も知ってる。問題はこころだ。人情味にあふれて正義感が強い、例えば赤穂浪士とか水戸黄門とかそんな江戸っ子、つまり江戸時代の人の精神を俺も受け継いでいるってことだ。

「ダイチ、ねえダイチったら」

デンプアの声が俺の高尚な思考に水をさした。

「何だよ、うるせーな」

「急に電話して来いって言うから出てきたけど、今日は一体何をしに、どこに行くんだい？」

「お前を誘ったつてことはメタバグ探しに決まってるんだろ。場所は、そうだな、中津交差点がいいな。あの辺は空間が不安定だからメタバグが取れやすい」

昨日の有償修復代をなんとか稼ぎ出さないといけない。

「メタバグ集めか。うん、いいよ」

デンパは普段ぼけっとしていているが、何故かメタバグを見つけるのだけは得意だ。

「なあ、メタバグを探すのって、なんかコツがあるのか？」

俺は聞いてみた。

「コツなのかどうかわからないけど、メタバグって音がすることがあるんだ。その音を追っていけばいいんだよ」

こいつ、またわけのわからんことを。

「音なんてするかよ。そんな風にずれたことばかり言ってるからいじめられるんだよ、お前は」

「うん、あの時はありがとう」

「……あ、あれはお前のためじゃねーよ。弱い者いじめばかりやってる馬鹿が気に入らなかつたから」

「そうだね、ありがとう」

デンパはにこにこしている。俺はちょっときまりが悪くなって前を向いた。

思ったとおり、中津交差点の近くにはメタバグがいくつも転がっていた。2人で2時間くらい探し回って、なんとか昨日の損害お年玉2年分を穴埋めするくらいは手に入れることができた。

「そろそろいいだろ」

俺は立ち上がった。いつの間にか交差点からちょっと離れたところまで出て来ている。

腰に手を当ててぐっと伸びをすると、汗の玉がぼとっと胸に落ちた。なんとなく日差しがなくて涼しいここだって、真夏の昼日中に2時間もいればさすがに汗だくだ。

近くの自販機でサイダーを2本買って、まだかがみこんで地面とにらめっこしているデンパの首筋にくつつけた。

「ひゃあ!？」

デンパは飛びあがる。くつくつ、こいつのこういうわかりやすいアクションも俺は嫌いじゃない。

「もう、ダイチったらひどいな。心臓がまだばくばくしてるよ」

「悪い悪い。大分集まったみたいだから、今日はもう帰ろうぜ。つきあってもらってありがとな」

デンパは受け取った缶のプルタブを丁寧に開けながら答える。

「ううん。僕、メタバグを探すの好きだから。メタバグって面白いよ。種類も色もたくさんあるし、音もみんな違うんだ。だから僕、自由研究のテーマもメタバグにしたんだよ」

「はは、そりゃデンパらしいな」

「ねえ、ダイチはどんなテーマにしたの？」

俺はぎくつとして目を泳がせた。

「お、俺か？ いや俺はな、ちょっと参考にしようと思ってノート借りたらあの牛女が追いかけてきてだな、あいつ字が腐るなんて言いやがった割に中身は白紙で……」

「えっ？ よくわからないんだけど、自由研究、まだできてないってこと？」

「で、できてるさ、決まってるんだろ。だから、牛……腐る……白い……そうだ、チーズだよチーズ！」

「チーズ？」

「そう、チーズの研究。論理的にな。チーズはどうやって作られるのか、牛乳が何故固まるか。カマンベールだのチェダーだの意味不明なカタカナは何のことか、チーズケーキはレアとベイクドとどっちがうまいか。この間外に夕飯に行ってブルーチーズのピザを頼んだら俺の分だけ青カビどっさりだったんだが、あれは店の配慮が足りないんじゃないか」

「へえ、すごいね。先生が、身近なことから始めてわからないことをよく調べてみましょう、って言ってたとおりだ。僕も頑張らないと」

「わっはっは、少しは俺の偉大さがわかったかね」

危ないところだった。下手したら「江戸っ子の研究」なんて答えてたかもしれない。いや、それはそれでいいんだけど、なんとなく赤っ恥をかきそうな気がした。

「自由研究はどうでもいいんだ、まだ夏休みは半分あるんだし。それより俺としちゃあ問題はフミエなんだよな」

俺は集まったメタバグを電腦ポーチにざらざら流し込みながらぼやいた。フミエにやられる度に、じゃなかったフミエと戦う度にこんなことをするのも、そろそろしんどくなってきた。それに、最近メタバグの量が少し減ってきたような気がする。

「はあ。お前は好きなことやってて金になるんだからうらやましいぜ」

デンパはにこつと首を傾げる。おめでたいやつだ。

俺は歩き出して、半分ひとり言みたいに続けた。

「なんかもつと効率よくメタバグを集める方法ってなーのかなあ。こつちにもつと戦力がありやあ、あのブスエをぎゃふんと言わせてやれるのに」

「ダイチって本当にフミエと仲いいよね」

俺は真っ赤になった、怒りで。

「ばつ馬鹿言ってるじゃねえ！俺はあんなやつ大嫌いだ。俺の夕イブはもつとおとなしくて優しくてだな、少し方向音痴だったり抜けてたりするところもあって、電腦ペットは犬だけど生犬は苦手で、やんちゃ盛りの妹に振り回されてちよつと困ってるお姉さん……」

「妙に具体的だね」

「あ？そうか？とにかく、俺はブスエなんかと仲良くねーの。だからあいつをやっつけるための戦力を……」

「そつか、戦力って言ったなら何もメタバグだけじゃねえ。まずは人を集めればいいんだ」

「人を集める？クラブでも立ち上げようっていうの？」

「おっそうそう、いいこと言うねデンパ君。なんかこうすんげーク

「ルなクラブを作つてだな、メタバグ集めだけじゃない、メガネに関する裏情報とかスキルを共有するんだ。うん、こりゃ面白くなってきたぜ」

「フミエの泣いて謝る姿が目には浮かぶ。ん、違うな。目をうるうるさせてるのは怖がってるせいじゃない。むしろ尊敬の眼差し、憧れの？」「ダイチ君、あなた本当は強かったのね。私間違ってたわ」なんつって。いやあやつと気づいたかね、この俺が頼れる男だと言うことに。はは、はははははは。

「何笑つてんの？ それで、クラブを作るのはいいとしても、肝心の人はどうするのさ」

「ごほん、そう人ね。えーと、まずデンパ、お前は決定でいいだろ」「うーん、いいけどあんまり危ないことはしたくないなあ」「不安げなデンパの背中を俺はほんぽん叩く。」

「大丈夫だつて、俺がついてるから。それから生物部にもいるだろ、現状に不満を持つてるやつらが」

「現状に不満というか、いたずらばかりしてる子ならいるよね。ガチャギリとかナメツチとか」

「そう、その2人だ。俺としちゃあそこにハラケンも加えたいんだけどな。あいつ、結構電脳関係の知識豊富だからさ」

「でもそれは難しいんじゃないかなあ。ハラケンって真面目だし、それにいつもカンナと一緒にだし」

「そこは説得のしよう……」
答えかけた俺の目に、少し先の十字路を横切る人影が映った。ナイスタイミング！

「よう、ハラケン！」

「やあ、ダイチにデンパ。何してるの、こんなところでハラケンが俺たちに向かつて歩き出した。」

「あつ研一！ そっちに行っちゃ駄目！」

後ろから急に声が上がって、俺たちはびっくりしてそっちを見た。

カンナが悲痛な顔をしている。あれ、カンナもいたのか。それにしてもどうしたってんだ？

俺たちは2人のそばに駆け寄った。

「あの、俺たちなんか悪いことした？ ごめん」

頭の後ろに手を当ててとりあえず謝った。女の子の悲しそうな顔には弱い。

「聞こえなくなっちゃった……せつかく声を辿っていたのに。道をずれたらいけないのよ」

カンナは寂しそうな顔をうつむかせる。でも全然意味がわからない。「カンナ、もういいだろ。今だつてちよつと霧が出ただけじゃないか。ここは空間が安定してないんだ、霧くらいあつてもおかしくない」

ハラケンはいたわりといらだちのちようど真ん中くらいの声でカンナに話しかけた。

「もつと進めば霧が濃くなって、クロエにも会えたかもしれない。

それに、研一にも聞こえたでしょう、ささやき声」

「あれはメガネの不調か混線だよ」

「ひどい……研一、やっぱり私のこと信じてくれないの？」

カンナはもう泣きそうだ。見ているこっちのほうがはらはらする。

「信じるとか信じないとかじゃなくて、もう1度落ち着いて考えなおそう」

「それって信じてないってことじゃない。もういいよ！」

その瞬間、俺は我が目を疑った。カンナの額からハラケン目掛けて、見慣れたあの光線が発射されたのだ。そんな、あのおとなしいカンナがメガビームを？

「わわわ、ストップストップ！」

深く考える暇もなく、俺たちは逃げまどった。不慣れなせいで、カンナの放った光線は全く狙いを絞れていない。勢いハラケンのすぐそばにいた俺とデンパにも公平にビームが降り注ぐ。

「カンナ、やめろってば！ カンナ！」

ハラケンの声にも全くビームがやむ様子はない。どっちに逃げても
的外れなビームが飛んでくるから、道の端っこに丸く縮こまるより
なかった。

「……………」
しばらくしてやっと光線が途切れた。おそろおそろ振り返ると、カ
ナナは額に手を当てたまま微動だにしないでいる。

少し経ってようやくビームが出てないのに気がついたカナナは、
目に涙をいっぱいたためて無言でハラケンをにらむと、くるっと振り
返って走っていった。

後にはあつちこつちで文字化けを起こし、口をぽかんと開けた馬
鹿みたいな顔が3つ残った。

「何だっただ、今のは」

「夏の嵐……………」

デンパが柄にもなく詩的な言葉を述べる。

「ごめん2人と。巻き込んだじゃって」

ハラケンは俺たちに向かって深々と頭を下げた。

「いいよ、お前のせいじゃねえ。けどどうしてカナナがメガビー
を？ お前が渡したのか」

「いや、僕もカナナがメガビーを持つてるなんて全然知らなかった」
つてことは、犯人は。

「ブスエだ。そう言えばあいつ、昨日メガシ屋の近くでカナナと一
緒にいた」

あのヤロー、どこまで俺の邪魔をしゃがる。

「ああ、ダイチも有償修復だね。しょうがない、3人でまたメタバ
グ拾いに行こう。ちなみにダイチはいくら……………！」

デンパは俺の腰のあたりを見たまま固まっている。

「どうしたんだよ一体。これ以上悪いことが」
あった。

腰に提げた俺のポーチをさっきのメガビーが貫通して、でかい穴
が開いていた。すると中のメタバグは、まさか。

「誰か嘘だと言ってくれ……」
ポーチの中身はきれいに跡形もなかった。

さつき来た道を引き返して、ぐずぐずとメタバグ探しを再開する。目につく分はあらかた拾ってしまったからなかなか見つからない。

「なあハラケン、カンナのこと聞いてもいいか」

俺は自分の手の動きと同じくらいのろのろと言った。

「うん……カンナがクロエって犬のペットマトンを飼っていたのは知ってる？」

「ああ。何回か散歩してるのを見たことがある」

「クロエ、死んじゃったんだってね。かわいかったのにな」

デンプも少し沈んだ声で答えた。

「うん、そうなんだ。カンナはすごく悲しんでた。それで、どうもそれを悪く引きずっちゃったらしい」

「悪く引きずった？」

「うん、しばらく前からこの辺でクロエの声を聞いたとか、影を見たとか言い始めて。放っておけば落ち着くかと思ってただけけど、全然治まらないんだ。そうして、どうしても一緒に来てほしいって頼むから、今日2人で来たんだよ。後は君たちの見た通りさ」

俺は電腦ペットを飼ったことはないけど、カンナの気持ちはなんとなくわかった。

でもわかったからこそ、このままじゃ駄目なんだということもわかった。

それじゃあカンナはどうすれば目を覚ますんだろう？

クロエは死んでしまったんだ、もう諦める、ってはっきり言うか？
いつもの俺なら絶対にそう言う。ハラケンもそうだったに違いない。でも、カンナはその言葉を受け入れられなかったんだ。

それならカンナに合わせて、クロエはきつとどこかにいるって言うてあげればいいのか？
駄目だ、そんな嘘は通じない。もし通じたって、更に悪い結果が待ってるだけだ。

結局外野が何を言っても無駄だ。カンナには自分でお別れを言わせないといけない。

でもその時誰かが近くにいてやらないと。本当はハラケンがいいんだろうけど、今は2人の間に隙間があるから難しいだろうな。

そこまで考えてふと頭に浮かんだことがある。昨日フミエはカンナと2人だった。きっと同じことをカンナから相談されたに違いない。

俺はにやつとした。あのおせっかいの答えは決まってる、俺にはわかる。

「ハラケン、一応聞いとくけど、お前カンナの話信じてないんだろ」

「うん。とても信じられるような話じゃないよ」

「ならお前は今カンナの助けにはなれない。カンナには、お前の力なしでクロエのことを解決させなくちゃ駄目だ」

傷ついたらかわいそうだからあえてフミエの件は黙っておいた。

「でも突き放してしまって大丈夫かな」

ハラケンは戸惑い顔だ。

「そういうあいまいな態度だからカンナだって踏ん切りがつかないんだろ。あのな、1度がつんと言ってやらないとわからねえんだよ、女子ってのは」

かわいそうだけど、そうしてやらないとカンナはこれから前に進めない。ハラケンもそのことはうすうす感じてたんだろ、俺を見てしつかり頷いた。

「ダイチの言うとおりだ。カンナには自分1人でやってみろってばかり伝えることにするよ」

ハラケンの顔に今日初めての笑みが浮かぶ。

「よし。それじゃあ労働に戻るぞ」

額をぬぐって見上げた空には雲1つない。天気予報だと確か、数日は快晴が続くってことだ。

今日、それに明日も、きれいな夕焼けが見られるはずだ。

第4章 夜の語ること

目の高さを持つてきた腕の上には飾りのない数字が浮かんでいる。

「8/13 AM 10:27」

1分に1度きりしか動かないそれを見るのに飽きてきた僕は、今朝届いてから何度も繰り返し読んだメールを再び開いた。

この展示室には僕以外誰もいない。絵が2枚、椅子が2つとその1つに座った僕。それだけだ。盆の稼ぎ時に企画展もやらないような美術館に客足は向かないらしい。

メールから目を離し、僕は並んだ2つの絵を眺めた。池に浮かぶ睡蓮の連作だ。

片方はおそらく昼間に描かれたものだ。日が照っているのだろう、丸い葉の淵が白く光る。その向こう、水面は深いような青空と池の周りの緑をおぼろに映して、安息と憧憬が慈愛とすら言える温かさを画面に与えている。

もう一方は夕から夜に移る頃の絵だ。画面の端から群青のしじまがやってきて、池に映える木々の残照が消える。瞬間ふつと弱まって歩み去る光が奇蹟のようにこの空間の中にだけとどまり、はかなさが永遠に固着する。

「真実は常に1つとは限りません」
急に後ろから声が響いた。

「この2枚は同じ池を描いたものですね。しかし2つから我々が受ける印象はまるで違う。違いますが、どちらもこの上なく美しい。それは、それぞれを描いた時間にこの画家の目を通じて意識に捉えられた風景が完全に再現しているからです。だからこれは絵を越えて現象に近い。そこに価値の高い低いも、まして本当も嘘もあるわけがない」

ひと息つくのを見計らって僕はそっとメールを閉じ、立ち上がった。
「お待ちしていました」

「迂遠な手段を取って申し訳なかつたです」

銀髪を丁寧に撫でつけ、糊のきいたシャツにループタイを締めた初老の男が、僕の顔を見て目を細めた。

彼は僕の隣の椅子に腰を下ろし、僕にも座るよう合図した。背もたれにはよりかからず、彼は背筋を伸ばして真っ直ぐに目の前の絵画を見つめている。ふと、その目に光が宿った。

「計画は予定通り進んでいますか？」

「はい、許可を頂ければ例の子にすぐにも扉を開かせます」

「彼女を生贄にしてCDメインを安定させるつもりかね？」

声が低くなつた。罪悪感をことさらにえぐるようなその言葉に、僕は思わず顔を背けた。

何をしている。ふいに声が浮かんだ。僕はそのために時間を費やしてきたんだ。居場所のないあの子供を望みどおりこの世から消してしまつたために。それで皆が幸せになる、これは喜ぶべきことだ。

勇子と初めて会つた時から、僕の中には2つの相反する感情が生まれていた。1つは、同じく肉親を失つたものとしての勇子に対する同情、彼女を助けたいと願う気持ち、もう1つは兄の幻ばかりを追いかけて現実を顧みない勇子への苛立ちと、それを利用して自らの計画の達成を願う利己的な感情。

これまでは、2つは勇子への援助という形に撚り合わされて、なんとか均衡を保ってきた。だがいよいよゴールが見えてきた今、2つの感情は僕を引き裂きつつある。

黙り込んだ僕が良心の呵責に囚われていると思つたのか、それともあながち間違いではないのだが、彼が弁解を口にした。

「失礼しました。責めているわけではないです。むしろ私は彼女がうらやましい。彼女は幸福ですよ、この睡蓮のようにね」

「……はい」

扉を開けた時、目論見どおり僕は勇子を捨てられるのか、僕には想像できなかった。

「おや、感傷的になつていますね。……そうですね、君の感傷は君

自身のものですから、私は容喙できません。それに感傷を追っているのは、一介の技師として猫目君と腕を競っていたあの頃を懐かしむ私のほうかもしれませぬしね」

彼は過去を思い出すようにゆっくり目を閉じた。その表情には過ぎ去った昔への憧憬というだけではない、複雑な感情の陰影が加わっている。

「本当を言うと猫目君と私との間にはまだ勝負がついていないんですよ」

彼は僕を見つめる。まるでその決着を付けさせてくれとでも願うように。

そうだ。僕には大きな目的がある。それに比べたら勇子の存在など霞んでしまう、父さんの研究を世界に知らしめるといふ目的が。

「大丈夫です。必ずうまくやります」

僕は頭を振って無理に勇子の記憶を追い出す。僕たち家族の受けた苦しみは、勇子のものよりはるかに大きい。同情なんてしている余地はない。

「確かですね。よろしい、行動を起こすなら本社が盆休み中の今が最適でしょう」

「では今日」

「ええ、すぐに大黒へ向かってください」

その時足音が聞こえて、僕たちは口を閉じた。

「もうお父さんたら、せつかくのお盆なのにこんな近場の美術館なんて」

「午後から休日出勤なんだから、仕方ないだろう。それにここなら社員割引が利くし」

家族連れか。僕は少し緊張を解く。

「あつ、この絵教科書を見たことあるわ。有名なのよ」
「プリーツスカートがよく似合う、柔らかい雰囲気の子が、多分妹だろう、幼児を連れて絵に近寄った。」

「両方ともきれいなえ。ねえ、キョウコはどっちが好き？」

聞かれた幼児は大人ぶって腕組みし、しばらく考えた後、おもむろに顔を上げた。

「うんち！」

展示室中に大声が響きわたった。

「こら、キヨウコ！ あつ、す、すみません」

女の子は顔を赤くして謝ると、幼児の手を引つ張つて部屋から出ていく。両親も苦笑しながらこちらに頭を下げ、彼女を追っていった。

一家の後ろ姿を見送った彼の顔に微笑みが浮かんだ。

「ふふふ、あの子供の言葉も1つの真理です。先ほども申したように事物そのものに価値などない。もしこの世に真実や価値というものがあつたら、それは世界に向かう我々の精神の、その混じり気のなさにおいてでしょうな」

そう言うとき彼は立ち上がった。

「君は自身の正義を全うしなさい。それが誰にも否定のできない君の真実ですから」

僕は部屋を去っていく彼の後ろ姿に深く頭を下げた。そつだ、父さんが消えてからずつと僕たちのことを助け続けてくれたこの人の言葉に嘘はない。僕はそれに従う。

突然どんどんと車の窓を叩く音が聞こえ、回想に浸っていた僕は現実に戻された。

「宗助！ 宗助！？」

その声に僕は跳び起きた。勇子だ。

馬鹿な。さつき通路を起動したと連絡があつた。それでもつ勇子とは2度と会うことはないはずだったのに。

しかし窓を叩く手とその向こうの勇子の顔は現実のものだ。いつもは感情を見せない硬さに鑑われたその表情が、焦りと不安に歪められている。何か問題が起きたに違いない。

窓を開け切るより早く、彼女は喋り始めた。

「どうしたの、一体？ 何度も電話してるのに」

「すまない、ちょっとな。それより何かあったのか」

「扉が、扉が見つからないんだ。通路は正常に起動したはずなのに、
すがりつくような視線が後ろめたい僕の思いを刺し貫く。逃れるよ
うにディスプレイに目を移した。」

「確かに通路は起動している。それなら扉が開かないはずが……」
そこで地図を見た僕は我が目を疑った。地図には扉が出現する可能
性のある場所が灰色で表示されている。さっきまでは1ヶ所しかな
かったそれが、まるで霧が街を覆うように無数に広がって、しかも
動いている。

「しまった…… 通路を開いたことで、街中の古い空間が反応して
しまったんだ」

勇子も身を乗り出して地図をのぞきこむ。

「扉がどこに開くかわからないってこと？」

「そうだ。きつともうどこかに開いているはずだ、早く見つけない
と。勇子、モジヨを呼んでくれ」

「わかった。私も近くを探してみる」

素早くダウンロードしたモジヨに指示を与え、勇子は走り去った。

迂闊だった。通路さえ起動すれば後はうまくいくと思っていたの
に。

これだけ範囲が広いと、扉はなかなか見つからないだろう。索敵
や情報収集に優れたタケルを連れてくればよかったか？ 今更なが
らにそんな後悔が頭をもたげる。

いや、無理だ。タケルには僕が勇子を切り捨てるところを見られ
たくなかった。たとえ時間が戻っても、僕は同じ選択をするだろう。
じりじりしながら30分近くも待った頃、ようやく勇子から連絡
が入った。

「モジヨが扉を見つけたわ！ 少し遠いから車に乗せて」

彼女の声は明るい。

「……ああ」

僕の声はそれとは正反対だった。これで僕は、勇子の最期を見届け

なくてはならなくなったのだから。

車に乗り込んでからずっと、勇子は爪が真っ白になるほどきつく我が身を抱え込んでいた。まるで喜びが体から溢れて弾け跳んでしまつのを抑えるように。

「お兄ちゃん。やっと会える、会える……本当に、宗助、今までありがとう」

ほとんど涙声で彼女は「ありがとう」を繰り返している。

僕は答えなかった。答えようと口を開けば、僕のほうこそ自分の中に渦巻く感情で張裂けてしまいそうだったから。

勇子に対する憐れみ、罪悪感、それでも勇子に幸福であってほしいという切望、だがそんな風に幸福を手に入れようとしている彼女への嫉妬、幻の中でしか生きられないひ弱な心への蔑み、憤り、探せば全てが僕の中にあつた。

15分ほどで目的地の近くに到着した。

「このあたりのはずだ」

車から降りると、建物の隙間から黒い鍵穴が垣間見えた。

「あつた……あれだ！」

駆け出した勇子を、僕は追いかける。

細い裏道を少し進むと、屹立する闇の全体が見えてきた。鍵穴は信号機のある交差点でこちらを向いている。

「お兄ちゃん」

立ち止まった勇子の呟きに答えるかのように、真っ暗な穴の中から溢れた夕映えの光が彼女を射した。この光。あの絵と同じ、夜に落ち込む一瞬前の輝きを永遠に留めた懐かしい薄暮。

「そこにいるのね 今行く！」

勇子は歩き始める。もう何もなくていい。勇子はすぐにあの残照に取り込まれて、そこで彼女の真実を手に入れる。それでいい、勇子にとってもそれが一番幸福なんだ。

無理にそう思おうとして勇子の顔を見た僕の目は、そこに表れた彼女の表情に釘付けになった。全ての苦しみ、悲しさを撥ね除けてきた仮面が取り払われたそこにあるのは、素直な、小さな子供の笑み。そうか、この子の本当の心は、あの事故の時から全然変わっていなかったんだ。

勇子の瞳から涙がこぼれ落ちて、道路にしみを作る。作り物の真実に向かって、彼女は進む。

「待て！」

気がつくとも僕は勇子を後ろから抱え込むようにしていた。

「宗助、何で？　そこにお兄ちゃんがいるの、離してよ！」

勇子はもがく。

「駄目だ、止まれ！」

何で僕はこんなことをしているんだ？　これはあの人にも、勇子にも、タケルにも、それに父さんにも、皆に対するの裏切りだ。一時の感傷に身を任せたって、待っているのは破滅だけだ。

そう思っているのに、腕に込めた力は弱まらなかった。

「勇子、待ってくれ。全て話す」

口が勝手に動く。やめろ、これが終われば、あと少しなのに。夢にまで望んだ僕の正義がそこまで来ているのに。

「全て？」

彼女が怪訝そうな顔を向けた、その時。

「クロエ！」

すぐ後ろからほとんど悲鳴のような叫びが聞こえて、僕たちは振り返った。

線の細くておとなしそうな女の子が、そこに呆然と立っている。

「あつ、あなたこの間の」

「クロエ、クロエなのね！」

勇子の言葉を無視して女の子は走り出した。鍵穴に向かってる？

「まずい！」

僕は勇子の体を離して女の子を追った。まさか、万が一、この子が

イマーゴだったら。

「おい、行くな！」

駄目だ、間に合わない。

女の子が鍵穴に入った。黄昏の輝きが一層大きくなって彼女を迎える。どこからか1匹のイリーガルが駆けてきて、彼女に跳びついた。

「クロエ……会いたかった」

イリーガルを抱きしめた女の子は立ち上がる……いや、立ったのは電脳体だけだ。本物の身体は真っ黒になってその場にうずくまっている。電脳体分離だ。

「何……あれ」

いつの間にか僕の横に並んでいた勇子が、茫然と呟いた。

「お家に帰りましょう、クロエ」

女の子の電脳体が体を離れかける。

その時、急にはあんと間の抜けたような音が響いた。交差点しまった、あそこは車道だ！ 近付いてくる車に気がついて狼狽した女の子は、車道を抜けようと走り出す。

「体を離れるな！」

僕は叫んだ。車は多分電脳ナビだ、電脳体は避けてくれるはず。だが避けた先に本当の身体があったら……

全てをなぎ倒すようなブレーキの轟音が僕の思考を吹き飛ばした。弾き跳ばされた華奢な身体は糸の切れたマリオネットのように宙を舞った。幸いだったのは、電脳体分離のおかげでそれが真っ黒い人影にしか見えなかったことだ。もしメガネを外していたら、僕は自分の精神の均衡を保てたか、自信がない。

実際にはほんの一瞬の出来事だったに違いない。だが空中に投げ出された彼女の体が近くのガードレールに衝突して真新しいそれに信じられないような歪みを作り、地面に転がって動かなくなるまでの時間は、僕には永劫に近いものを感じられた。

アスファルトの上の身体からどんどん黒い領域が広がって、人の

形が失われていく。黒い、おそらく液体が何であるかは容易に想像できたが、僕はそれ以上考えるのをやめた。

「嘘、嘘でしょ……」

すぐ隣で自失した声が響いた。勇子。しまった、せめて彼女の目をふさぐくらいはしてやれば良かったのに。

「救急車だ！ 救急車を、呼んで……くれ……」

車からまろび出た運転手の動転した叫びは、すぐに力が抜けて小さな呟きになった。メガネをかけていない。目の前のものを生で見てもその状況を理解したらしい。

人が集まり始めた。こんなさびれた場所にどこから湧いてきたのか、既に人垣ができつつある。

気がつくと鍵穴はもうどこにもなかった。僕は立ちすくむ勇子の腕を取って目立たないようにそつと裏道に引き返し、そのまま車に戻った。

「はい、彼女には大黒のホテルに泊まってもらいます。ええ、その点は心配ありません。彼女の安全と健康はメガマスが保証します。

僕がついていながら申し訳ありません」

勇子の保護者との通話を終え、柔らかい暖色の光に包まれた室内に目を戻した。勇子はベッドの上で頭から毛布をかぶって丸くなっている。この部屋に入ってからずっとそうだ。厚い毛布に隔てられ、僕にはその内側の感情をうかがい知ることができない。

泣いているのだろうか。そうだとしたらまだいい。涙は鬱積した感情を外へ押し流してくれる。それに、涙を流すということは、他者に己の心をさらけ出すことでもある。もし泣いているなら、彼女はまだ心を閉ざし切ってはいない。

だが、ベッドの上の丸い塊からは、嗚咽の音も、身を震わせる動きも伝わってこない。勇子は頭のいい子だ。泣くことが事故から一種の逃避や自己正当化につながることをわかっているのかもしれない。

それならば、心の限界を越える大きな罪の意識を抱え込んで、彼女はどうかやって生きていくつもりなのか。僕はそれにどう関わっていけばいいのか？

そうだ、僕は一体どうするんだ？ さっきから勇子のことばかりを考えているのは、僕自身のことを考えるのが怖いからだ。僕には、あの事故の責任が。

電話が鳴った。

「猫目です」

「宗助君ですね、私です。事故の情報が取れましたのでお伝えします」

あの人からだ。勇子に聴こえないよう、僕は隣の部屋に移った。

「事故のこと、本当に申し訳ありませんでした」

「起きてしまったことは仕方ありません。跳ねられたのは、芦原かな、10歳。大黒市立第3小学校の5年生です。即死だそうです、痛みを感じる暇もなかったでしょう」

「そうですか……」

「不幸な事故でした。次回は雇の場所を特定できるよう、暗号式を再検討してください。さて次に彼女のメガネですが……」

あっさりと事故の話題を終えようとする電話の向こうの声に、僕は少し慌てた。

「ちょ、ちょっと待ってください。事故のこと、どうするんですか？」

「どうするとは何を？」

声は落ち着き払っている。

「だから、事故の責任とか、僕たちはこれからどうすべきかとか」

「何をする必要があるんですか？ 言っただけでしょう、これは不幸な事故です。本社と警察は電腦ナビの信頼性を傷つけたくないですし、我々の行動が明るみになるのは論外。関係者の利害は一致し、君たちは顔を見られてもいないのですから、揉消しは容易です」

「そんな」

反論しかけた僕を、声が遮る。

「それより話の続きですが、面白いことがわかりました。顧客リストから彼女のメガネの型式を調べたところ、金沢旧工場第3製造部のラインと判明しましたね」
嫌な予感が走った。

「旧工場と言ったら元コイルスの……」

「ええ、もちろん社外には漏らしませんが、内部で憂慮すべき事態になれば第3製造部については抜本的なラインの見直しが必要になるでしょうな」

信じられない、信じたくない言葉に僕は絶望に似た衝撃を受けた。

「何故コイルスのラインを潰す必要があるんです？ 大体イマーゴとメガネ自体は関係ないでしょう」

「今の技術ではね」

彼は呟いて、少し間をおいてから話し始めた。

「第3製造部は私のところと競合しそうですね、このままではコイルス同士の内部抗争になってしまふんです。あちらさんには悪いが、転ばぬ先の何とやらですね」

それから、もちろん私はイマーゴのことに触れたりしませんよ、あれは社内のタブーですから。私はただ、一番旧式に近い第3製造部の製品が電腦ナビの不具合を引き起こしたことについて、機能上の問題の可能性を懸念してみせるだけです。それを聞いて本社品質部の臆病者どもが何を決めようが、私の責任ではありません。

いずれにせよ、今回の事件はある意味で好都合でした」

「好都合って、あなたは人の命を何だと」

「生命も事物と同じです、客観的価値などありません。ですから私は私の真実に従って、私と私の愛する者の命を守り、それ以外を有効に利用しているのです」

その言葉に思い出されるものがあつた。

「そうやって、僕のことも利用しているんですか」

僕は喉から声を絞り出した。

「とんでもない、君は私にとって家族同然です。利害とは無関係に君のことは守りますよ。5年以上も君たちを支えてきた私を疑うんですか」

「……」

半ば無意識に指が動いて、今朝のメールが開く。

「目の前で人の死を見たんですから、動揺するのは理解できます。いずれにせよ君は心配しなくてよろしい。しばらくゆっくり休みなさい。事故の件はこちらで全て処理します」

「……わかりました」

僕はのろのろと答え、電話は切られた。

通話を切ってからようやく照明がついていないことに気がついた。僕は闇に隠れるように座り込んだ。何が正しくて何が間違っているのか僕にはもうわからなかった。あの時僕がもし勇子を止めなければ、全てがうまくいっていたのかもしれない。土壇場で皆を裏切った視野の狭い正義感がこの事態を招いた。いや、それは正義感ですらない、勇子を見殺しにするのが恐ろしかった僕の臆病さだ。

どちらにせよ今ここにうずくまっているのは、自分の心にも周囲の思いにも正直になることのできなかつた唾棄すべき人間だ。

そして更に愚かしいのは、事故の法的な責任を問われることがないという見通しに、僕が秘かに安堵していることだ。

目を上げると、暗い部屋の中、さっき開いたメールだけがぼつと光っている。

僕はメールを顔の高さに持ってきて、そこに記された番号に電話をかけた。

「もしもし、猫目宗助と申します」

「おお、猫目さんの息子さんだね、話してくれる気になったか」
エネルギーシユな中年の男の声が快活に返事をした。

「はい。……あなたのおっしゃるとおり、彼はあなたたちを裏切るうと、第3製造部を潰そうとしています」

「やっぱりそうだったか、よく教えてくれた。これからも我々に協力してくれるな」

「ええ、これで僕は彼に背いたんですから、あなたたちの庇護に入るよりない」

僕が自嘲気味に言うと、相手は少し考えたのか、時間を空けて答えた。

「気に病むことはない。メールではショックが大きすぎるだろうと思わなくて書かなかったんだが、奴のほうはもう君を切り捨てるつもりでいるんだ」

「えっ、どういうことですか」

「奴が第3製造部を潰そうとしている本当の理由は、あいつが新工場の開発部を抱き込んで極秘に進めている新モデルの競合品をなくすためだ」

彼はそこで一旦話を切ってから続けた。

「よく聞けよ。その新モデルは、イマーゴの影響を完全に排除することに成功したらしい」

僕は耳を疑った。

「馬鹿な……そんな物ができたら僕たちの計画は……」

「そうだ、イマーゴを利用した君の計画は白紙に戻り、猫目さんの業績も闇に葬られる」

「いくらなんでもそんなこと……じゃあなんで、今まで彼は僕を助けてくれていたんですか？」

「開発がうまく行かなかった時何食わぬ顔でコイルスに戻るための布石、それから、君が使っているイマーゴの子供のデータを取るためだろう」

平衡感覚を失った身体がぐらぐら揺れる。今まで、僕はずっと裏切られてきたというのか。

「すまなかつたな。この話はもう少し後でと思っていたんだが、どうも奴は何かかぎつけたらしい。我々も急いで動かなくちゃならん。早々に君の助けが必要になりそうだ」

「……その件はこちらに情報があります。内容を取りまとめずぐにメールします」

「何？ そうか、さすがは猫目さんの息子だ。ではよろしく頼む」

「承知しました」

「ありがとう。それではまた」

相手がそう言った後、しばらく沈黙が続いた。

「あいつ、栄達欲に目が眩みやがって。昔はあんな奴じゃなかったのに」

しみりとした呟きが聞こえ、やがて唐突に通話は切れた。

暗闇の中で、僕は考える。

どんな人間でも、甘く聞こえの良い言葉でエゴイスティクな欲望を包み隠して、それで自分さえも騙している、そんなものだ。

正義が、真実がどうのと言っていたついさっきまでの自分のくだらなさに、つい失笑が漏れた。もう自分のエゴイズムを恥じることはない。誰であれ結句には己の幸福を求める、それを脱する者はいない。

あの人を恨むことはすまい。彼には彼なりの「真実」とやらがあるのだらう。それに従って最後まで僕を欺こうとしたのは、むしろ尊敬すべきかもしれない。

だからその教えのとおり、僕も僕の「真実」のために彼を切る。軽薄な世間の倫理を僕はもう当てにしない。

だから。僕は確信した。

次こそ僕は勇子を捨てることができるだらう。その時はもう躊躇しない。

それだけが、僕が本心から望むことなのだから。

第5章 朝の語ること

「8月13日、カンナが」

昨日書きかけた僕の日記は、そこで止まっている。カンナが一体どうしたというのか、僕にはわからないから。まだ10歳のカンナが突然いなくなるなんて、そんな理不尽、僕には信じることができないから。

僕の部屋の窓は開け放してある。彼女がいつものように道から僕を呼んだ時、聞き逃してしまうことがないように。

カンナはいつも、扉越しに僕の部屋の窓の前に立って、ちょっとつむいて僕の名を呼ぶ。大声を上げるのが気恥ずかしいのかくぐもって腰の定まらないその声は、だから窓を閉めていたら絶対聞き取れないし、今みたいに全開でいても気がつかないことさえある。玄関で呼び鈴を鳴らすか、電話をかけるかにすればいいじゃないかと何度も言ったのだけれど、どうしてかカンナはその習慣を改めなかった。だからエアコンを使う季節には、カンナが来る時間を見計らって窓を開けておかなくてはならなかった。

けれど今日はいつもの時間になってもカンナの声が聞こえてこない。何故だろう？ 麻痺してしまったかのように思考の働かない僕の心は、答えのない問いを何度も繰り返す。何故だろう？

動かない頭で空っぽの景色だけを眺めていた僕は、ふと気がついてメガネをかけた。いつもの習慣でそうしただけなのかもしれないし、もしかするとメガネをかけることでそれまで目に映らなかった何かが見えることを期待したのかもしれない。

だがもちろん、そうやって見上げた窓の外にも僕の心を満たしてくれるものはなかった。そこにはぼつかりと穴が開いたように高い空があるばかりだ。

失望して部屋の中に視線を戻した時、窓に近い机の上に、僕とカンナの共有にした自由研究のフォルダがあることに気がついた。

フォルダの中には、最近保存された未整理のファイルが雑然と並んでいる。ほとんどカンナが作成したものだ。僕は近頃少しやる気を失っていて、ほとんどそこに手をつけていなかった。

しばらく見ない間に、カンナはいくつものデータを集めていた。それで、1週間ほど前のことを思い出す。ネット掲示板の情報と自分で見たと言いつけるあやふやな「証言」ばかりのあいまいな根拠に立って自由研究を進めようとしているカンナに、もう少し客観的な資料を探したほうがいいと僕は言ったのだった。

カンナは僕の忠告を聞いてちょっとむくれていた。だから、カンナがこんなに真面目に僕の言葉を受け止めていたことに僕は驚いた。図書館で見つけたらしい古い雑誌の記事、ニュースサイトの特集、ネット百科の写し、新しいファイルには様々な種類がある。僕は何となく、その中で目についたTV番組の動画を開いた。

街頭インタビューの記録らしい。赤いリボンがかわいらしい制服の、多分小学生の女の子が2人映っている。目の部分だけは黒い線で隠されているけれど、それ以外の特徴と制服から、知っている人にはすぐに誰だかわかってしまいそうだ。

質問がテロップで表示される。

「Q.『ミチコさん』の都市伝説を信じていますか？」
「信じてます」

1人が意志の強そうな声できっぱりと答えた。

そんな風に言い切ってしまったって、学校でいじめられたりしないだろうか。ミチコさんの噂はこの学校でもちよつとしたタブーだ。

「ねえ……」
その袖を、片側の、栗色の髪をした子が引っ張っている。カメラが向けられると、

「え、私？ ……私は……わかりません」
自信なさそうに胸に手をやって、その子は曖昧な返事をした。

その様子をちらと眺めた最初の子は、引かれた袖口を強く振り払い、まっすぐカメラに向かった。

「私、見たんです。道路の突き当たりに真っ黒なもやみみたいなものがあって、その向こうにはずの道が続いてたんです」
僕は耳を疑った。そんな馬鹿な。

「もやの隣に、黒い人影みたいなものも見えました」
嘘だ！

僕は動画を閉じた。違う、そんなことがあるはずがない。

この子が言っていることはこの前カンナが僕に話したことと一致している。カンナは寂しさで空想に縋りついていただけのはずなのに。まさか、あの言葉は。

「研一」

昨日、カンナはいつもより更に遠慮がちな声で、窓の外から僕の名を呼んだ。

「ああカンナ、上がってよ」

僕は1つの決心を胸にして玄関に向かった。靴を脱ぎながらこつちを見たカンナは、少し決まり悪そうに目をそらした。

「研一、昨日のことはごめんね。私、急に悲しくなっちゃって、それで」

部屋に入り勧められた椅子に座ると、カンナはすぐに話し出した。

「もういいんだよ、昨日は僕のほうこそ悪かった。謝るんならとばつちりを食ったダイチたちにしなよ」

僕はベッドに腰掛けながら答える。

「うん、わかった」

カンナは僕を信頼しきっているかのように屈託なく微笑んだ。

カンナが笑う時にする、少しだけ首を傾げる動作が僕は好きだ。できることなら、カンナにはいつまでもそうやって幸せでいてほしい。

「でも私ね、信じて欲しかったの、研一には」

僕は唾を飲み込んだ。昨日決めたこと、今、カンナに伝えなくちゃいけない。

「カンナ、そのことなんだけど」

カンナは僕の態度の変化を敏感に察知して身を固くした。笑い顔が一転して、寂しそうに伏せられた目が僕の気持ちを鈍らせる。

僕が言いあぐねていると、彼女のほうから訊ねてきた。

「やっぱり信じてもらえないの？」

自分で決心して、ダイチとも約束したことではあるけれど、カンナに面と向かって言われるとどうしても返事が出てこない。僕は自分を叱咤して、それでようやくカンナの顔を見た。

カンナを傷つけたくはない。でも、これからのカンナのことを考えたら僕が言っただけじゃないと。

「カンナ、僕は、カンナの言うこと、信じるのができない」
カンナの顔が歪む。

「研一も、そうなんだ」

低い声が肯定とも否定ともつかず響いた。うつむいた顔がどんな表情をのぞかせているのか、僕にはうかがうことができない。

「それでも」

「カンナはクロエとちゃんとお別れが出来てないんだよ。だから、ありもしないものが見えてしまったんだ。現実と頭の中で考えたことがごちゃごちゃになっているんだよ、きっと。いつまでもそうやって閉じこもっていちゃいけない。カンナはもっと強くなるないと駄目だ、クロエのこともしっかり受け止められるくらいに」

カンナが僕になんて返事をするのか聞くのが怖くなって、カンナの言葉に押しつぶされるように、僕は思いついたことを深く考えもせず並べ立てた。

言い終わった後でそれが失敗だったことに気がついた。さっきまで悲しみを示していたカンナの面もちに、今は明らかな失望が浮かび上がっている。

「ごめん、ちよつと言い過ぎだった」

僕が慌てて謝ると、

「うつん、言い過ぎなんかじゃないよ」

カナナは自嘲気味に答えた。声のトーンが変に高い。無理やりに自分を抑えつけている証拠だ。

「研一が私のことどう考えていたか、わかっちゃった。私、そんなに子供に見えた？」

「えっ？ 子供って……」

感情が今にも崩れそうになっているのはわかるのに、カナナが言いたいことが何なのか僕にはわからない。

「クロエが死んでしまったことを認められなくて、自分に嘘をついて誤魔化してる。研一には私がそんな子供に見えたの、って聞いているの」

カナナの口調は今度は急に静かになったけど、そこにはつきりと現れた拒絶の意志に、僕は焦った。

「いや、そんなこと」

「研一、私と一緒にいて楽しかった？」

今度はカナナが言葉をかぶせてきた。

「私は楽しかった。たとえ喧嘩してる時とか、お互いちょっとうまくいっていない時でも、研一と一緒にいるだけで嬉しかった。研一もきつとそうだろうって、私、勝手に思った。でも、違ったんだね。研一にとって私は手のかかる子供。いつも一緒にいてあげないと迷子になってしまうから、それで仕方なく付き添ってあげてたんだね」

「何言ってるんだ？ 僕はカナナのために」

「ほら、そうじゃない。何でも私のため、私のため。研一は大人で、私は子供なんですよ」

自分でも知らずに隠してきた、僕の中のずるくて計算高い心を正確に言い当てられて、恥ずかしさとも後ろめたさともつかない狼狽が僕を襲う。

「違うんだ。僕はカナナのことが」それに続く言葉がまるで予想もしていなかったものであることに自分でも驚いたせいで、僕はそこで黙り込んだ。

「同情なんかいらナイよ！」

カンナの叫びに、心がさつと翳る。さつきはあんなに鋭く僕の心をえぐったのに、今の気持ちはわかってもらえないのか。その寂しさと怒りから言葉が口をついた。

「そうだよ、カンナは何かあるといつも研一、研一って僕のこと頼ってきて、僕なしじゃ何にもできないじゃないか」

カンナはどきつとしたように1歩退いた。

「自由研究だって僕には他にやりたいことがあったのに、共同研究にしたいって無理やり頼みこんだの、カンナだろ」

こんなこと言うつもりじゃなかったのに。押しとどめる気持ちもあつたけど、喋ることでますます気持ちが昂ぶって、止まらなかつた。「いつも僕にばかり頼るなよ！ 悔しければ1人で何かやってみせろよ！」

荒く息をついて、そのまましばらく僕はカンナの目からこぼれ落ちる涙を眺めていた。

カンナはなかなか泣きやまない。その間、僕はただカンナを見ていただけ。そう言ってしまったのが良かったのか悪かったのか、感情ばかりが心を覆い尽くして、判断することができなかつた。

泣き声が聞こえなくなつて少しして、カンナは顔を上げた。

「わかつた」

言葉に秘められた見たことのない強さに、かえって僕はうるたえた。

「私、証明してみせる。黒い鍵穴みたいなものの中に道があつて、真つ黒になつたクロエと、人の姿が見えたこと」

それだけ言つと立ち上がつて、カンナは部屋を出ていく。僕は見送りもせずその場にじっとしていた。

「その時には」

いつもの柔らかい声が耳に届いて振り返つた時には、とんとんと階段を下りる音が僕に別れを告げていた。

「ケンちゃん」

突然名前を呼ばれて、僕はぎくりとした。

戸口にオバちゃんが立っている。

「カンナちゃんのご遺体、お家に戻ったそうよ。お通夜の前にケンちゃんにお別れに来てほしいって、お母さんから連絡があったわ」

「カンナ……」

僕は身じろぎして、椅子ががたつと大きく音を立てた。

「ケンちゃん、あなたが今何を考えてるか、わかるわ」

オバちゃんは僕を見つめて言う。

「カンナちゃんが死んでしまったことが、あなたにはまだ信じられない。もし、今カンナちゃんの家に行ったら、それがどうしようもない現実になってしまう。あなたはそれが怖い。だからあなたは行きたくない」

多分オバちゃんの言うとおりなんだろう。それに加えて、カンナを信じてやれなかったことへの悔いと後ろめたさが僕の中にわだかまってもいる。

「わかつているんでしょう。それじゃあなたのためにも、カンナちゃんのためにもならない。ケンちゃん、行きなさい」

それだけ言うと、答えを聞かずにオバちゃんは階段を下りていった。僕はゆっくりと椅子から立って、身支度を整えた。

外は強い日差しでかげろうが立って、幻のような明るさが広がっている。それなのに、踏み出す僕の足取りは闇を行くように頼りなく、地の底に沈むように重たい。カンナの家に近いにつれて、その重さには明確な後悔が加わった。

歩くこと自体に耐えがなくなつて立ち止まった道のわき、干からびた側溝の中で、白い小さな花が風に揺れていた。数日もすればしおれてしまつたろう、名前も知らない雑草だ。

でもその白は僕にはあんまりきれいな過ぎた。どうしようもない悲しみが込み上げて、悔しくて、寂しくて、僕はそれをむしり取った。

「ケンちゃん、来てくれてありがとう。カンナもきつと喜んで
いるわ」

おばさん　カンナの母親が僕を案内してくれた。

カンナと会うときは大抵が僕の部屋で、これまで僕がこのうちに
来たことは多くない。僕を迎えたこじんまりと落ち着いた空気はカ
ンナそのものみたくて、本人がそこにいないことが不思議に思える
ほどだった。

建物の北側の一角には和室がある。陽が入らないせいで薄暗くて
冷いやりとした空気の沈むその部屋に、少し小さなサイズの白木の
棺があつて、カンナはその中で眠っていた。

僕は棺の前に座つてカンナの様子を眺めた。

体は布団で覆われて、顔だけが見えている。とてもきれいな顔だ。
「とつてもきれいな顔でしょう。顔には傷が付かなくて……」

言い終わる前におばさんの言葉は小さくかすれるように消えて、代
わりにすすり泣きの声が僕の背中に届いた。

「カンナ」

僕は語りかけた。

カンナがこんなことになつてしまったのは、僕のせいなんだから。
僕がカンナの話信じなかつたから、それで一人で家を出たんだろ。
ごめん、僕が悪かつた。謝るから、何か言つてよ。許さなくてもい
いから、答えてよ。

僕は知らず知らずのうちにカンナの顔に耳を近付けていたのだけ
れど、何も聞きとることはできなかった。

「そのお花、持ってきてくれたの？」

おばさんがハンカチを目に当てながら僕に問いかける。それで初め
て、さつきむしつた花をずっと握りしめていたことに気が付いた。

「カンナの隣に置いてあげてもいい？」

急に思いついて訊ねた僕におばさんはゆっくり頷き、僕はカンナの
傍らにそつと花を寝かせる。

布団が白いせいで花はなんだかくすんで見え、おまけに乱暴にむ

しつたせいで根の一部が残っていて、茶色の土が布団を汚した。慌てて払いのけようとすると、土は細かく崩れて、布団の上に黒く広まった。それはカンナに対して僕が犯した消え去ることのない罪の証拠なんだと、どこからか声が聞こえて、僕はますます動揺した。

「いいのよ。土は後で拭いておくから」

「ごめんなさい、おばさん。僕、結局カンナに何もしてやれなかった」

その時、初めて僕の目から涙がふきだした。

こんなにきれいな顔で眠っているのに、カンナはもう戻ってこない。眠っているカンナから心が永遠に失われてしまつて、そこに何もかも飲み込んでしまつ空虚が居座っているのが、僕にはどうしようもなく悲しかった。

「いいのよ。いいの。小さくてかわいらしくて、カンナ、まるであなたみたいの花。ケンちゃんが持つてきてくれたのよ。良かったわね」

僕は泣き崩れて、その後、部屋を出るまでのことはよく覚えていない。

カンナの家を出た後、僕の足は自然とあの事故現場へと向かっていった。

カンナがいなくなつてしまったことの残酷さに、僕には耐え切れなかった。カンナと僕の間がこんなに呆気なく断ち切られてしまつ、僕たちがそんなにちつぽけでひ弱な存在であることが許せなかった。

だから僕はあの交差点へ行つて、そこで何かカンナの遺したものを見つけて、そうすることで僕がまだカンナとつながりを持っていることを確かめようとしていたんだと思う。

ほんのしばらく前に2人で歩いた道が、何年ぶりに訪れるような懐かしさを伴つて続いていた。僕がカンナとそこにいた、その痕を見つけることができ嬉しかったけれど、反面それがもう僕の中では過去に属することに変わり始めていることを悟つて、そうやっ

て傷つくことを逃れようとする自分のずるさをやりきれなく思った。直截目的地を目指さないでしばらく気持ちのままに進んでいた僕は、つとその気持ちがあが何かに導かれていることに気がついた。

声。

カンナに向かってあれほど否定したその声が、僕をいざなっている。混線でもメガネの不具合でもない、確かに僕を呼ぶ声がおぼろに聞こえてくる。

カンナ。そつちにいるんだね、カンナ。いつの間にか僕の周りに濃く立ちこめた電脳霧の、その特に凝った向こう側に、何かとても美しいものが見えかけた気がした。もう少しだ。カンナ、ごめんよ。今、そつちに行くから。

「来ちゃ駄目！」

全身を貫くような鋭い叫びに、僕は硬直した。何かとても大きな力が走り抜けるような気がして、僕は思わず脇道に退いた。

唐突に、蝉が鳴き始めた。ささやき声も電脳霧も跡形もなく消え去って、さつきまでと同じ夏の1日が、僕を囲んでいた。

今のは幻だったのだろうか？

いや、違う。僕は確かにそれを感じた。

皆は僕がカンナと同じだと、現実には耐えられず空想に逃げ込んだのだと、そう言って笑うだろう。構わない。それは、カンナを信じなかった僕への罰だ。

僕は誓った。

いつかきつと、もう1度君と出会う。

その時に、僕があの時言えなかったことを伝える。

だからそれまで、カンナ、待っていて。

第6章 愛の語ること

本当はお婆ちゃんの家にもう1晩泊まって明日の日曜に帰るはずだったんだけど、予定を1日繰り上げて私たちは大黒に戻ってきた。

お通夜が始まるのは夕方の6時から。まだ少し時間がある。私はアイコに電話した。

「あつ、フミエ。もう戻ってきたの」

「うん。それで、時間までアイコの家にもいいかな？」

「いいよ。一緒に行こ」

お母さんの選んだカラスみたいな服を着て、私は家を出た。

アイコの部屋は、何と云うかとてもセンスがいい。フローリングではない畳敷きで、今どき珍しくベッドもないのに、余計な物が少ないせいか、そういう普通なら垢抜けないところまですっきりとした感じだ。

「この部屋ってなんかスマートだよ。畳だつて私んちと変わんないのに、なんでだろ」

「変わんなくないよ。この畳、特注で1枚10万円」

「はあ!？」

思わず立ち上がって部屋の端っこまで寄り、壁に背中をくっつけた。

「その壁紙も特注で1面10万円」

「げげ」

私は部屋の真ん中につま先立ちになる。座布団に座ろうと思ったけど、またとんでもない金額を言われそうだからやめた。

にやにやしなから私の様子を見ていたアイコが急に吹き出した。

「ばっかねえ、そんなわけないじゃない。普通の畳だよ。座布団も特売で800円だったやつだから、安心してお座り」

「も、もう……アイコったら人が悪いわよ」

私は座布団にどすんと腰を下ろす。

「まあ何事も気の持ちようってことね。何だっってちよつと工夫すれば意外ときれいに見えるものよ」

そんなことを話すアイコは大人っぽくてちよつと眩しい。そう言えば着てるものだっって同じだ。私と同じ黒っぽい地味な私服なのに、私がカラスなら彼女は月夜に舞うタカのような。いや、タカは夜目が利かないからそれはないな。ああそうだ、ヨタカつてのもいたはずだ。でも何故かそう言うともものすごく失礼な気がしたから、私は口をつぐんだ。

「アイコ、もうカンナの家に行ったの？」

「ううん。同じ生物部だったけど、私、カンナとクラスが一緒だったことつて1度もないから、すごく仲が良かったわけでもないし」

「そうなんだ」

私だっって取り立てて仲がいいってほどじゃなかった。でも、私には1つどうしても悔やまれてならないことがある。

「それでね、ちよつと変な話を聞いちゃったんだ」

急に声がひそめられたせいで、私は顔を上げた。

「何それ、どんな話？」

「カンナが事故に遭ったの、中津交差点なんだ。あそこ、前からいろいろうわさがあつたでしょ。電脳空間がおかしいとか、イリーガルが出るって話も、私、聞いたことがある」

そこで一旦言葉を切つて、アイコは言いづらそうに続ける。

「でね、友達のお母さんが偶然事故を見てたらしいんだけど、その様子が変だつたんだっって。車が何か避けるみたいに急に向きを変えて、それでカンナをはねたんだっって。車つて多分電脳ナビでしょ。もしかして電脳の何かに操られたのかもしれないって」

私は愕然とした。

「そんな……じゃあカンナはイリーガルのせいで事故に遭つたっってこと？」

「そう決まつたわけじゃないよ。単なる交通事故かもしれない。で

も、おかしなところがあるのは確かみたい」

「私、カナと一緒にイリーガルを探しに行く約束してたんだ」
しまった、という顔になってアイコはうつむいた。

「こんなことになったの、もしかして私のせいなのかな。私がお婆ちゃんのとこに行ったりして約束を伸ばしたから、カナ、1人で出掛けたのかな」

私ってば馬鹿だ。そう言った途端に、カナに謝りたい、でももう謝れないってことがはつきりわかって、目に涙が溜まった。

「ちよつと、フミエが責任感じることなんてないよ」

アイコは慌ててフォローに回る。

「今のはあくまでうわさ。きっと本当はもっと単純な不具合か何かだよ」

アイコにこれ以上引け目を感じさせたら悪いから、私はこぼれかけた涙をぬぐった。

「うん、事故のことは考えたって仕方ない。アイコ、教えてくれてありがとう。お通夜で初めて聞いたら、私もっとショックだったろうから」

「ごめんね」

「謝んなくていいつたら」

わざと笑顔を作ってアイコの背中を叩いた。

「でも、私カナとの約束を守れなかったのは確か。私、もうこんな思いはしたくない」

「ならさ」

アイコが言った。

「これからはそんなことが起こらないようにすればいいよ。細かいことはよく知らないけど、カナ、電腦ペットを亡くしてからイリーガルのこと調べるようになったんでしょ。きっと寂しかったんだよ。フミエ、電腦とかメガネのこと強いんだからさ、そんな人が出ないように助けてあげればいい」

「えつと、助けるってどうやって……」

「いろいろあるじゃない。例えば、そう、いなくなったペットを見つけてあげるとかさ。くよくよ考えるより何かいいことしたほうがカナナだってきつと喜ぶよ」

アイコの言葉で、少しだけ気分が軽くなった。でもペットの搜索なんてどうやればいんだろう。そうだ、今度メガばあに聞いてみようかな。

「あつ、そろそろ時間だよ」

私たちは2人でカナナの家に向かった。

ほんの3日前、元気にメガビーを浴びせてくれたカナナがもうこの世にいないなんて、誰が信じられるだろうか。おとこの夜、緊急連絡網でその話を聞かされた時、正直言つて俺は半信半疑だった。今でもその気持ちは続いてて、中途半端な気分のままでお通夜に向かっていた。

こんな風でいいのか？ クラスが違うとは言っても同じ学年の子が死んでしまったんだから、もっと悲しくならないといけないんじゃないか？

「おーい、ダイチ」

「久しぶりっす」

後ろから名前を呼ばれて俺は振り向いた。

「よう、ガチャギリにナメツチ。お前らも」

「ああ、お通夜だ。でもなんだな、あんまり実感湧かねーんだよな、同級生が死んじまうなんて」

「右に同じっす」

こいつらはカナナと同じクラスだけど、それでも俺と似たような気分らしい。それとも今まで近くにいたからこそなおさら信じられないんだろうか。

こんな時に喋ることもなくて、3人でぼけつと空を見上げながら歩く。今日も天気はいい。お通夜が雨じゃなくて良かったな。

丁字路を左に曲がると、ちらほらと弔問客の黒っぽい姿が目立ち始めた。

すぐ前を歩いている数人の大人の話が漏れ聞こえてくる。

「葦原さん、栄転が決まって喜んでいたのに、悔しいでしょうね」

「うん、お嬢さんとは1度会ったことがあるだけだけれど、うちの娘と大違いで、おとなしくて物柔らかかなお子さんだったな。もしかすると娘と同級生になったかもしれないのに」

あれ、クラスの誰かの親かな？ でも見たことのない人だ。

「そう言えば上のお嬢さん、同年でしたよね。大違いなんてことないと思いますけど。優しそうなお子さんじゃないですか」

「そうなるように『優子』って名付けたんだけど、あれは典型的な内弁慶だよ。まあそんな娘でもやっぱり可愛いものさ。本当に葦原さんの心中が察せられるよ」

「それで金沢からいらしたんですか」

「いや、実は来週明けに大黒市の空間管理室へ出張の予定でね、だから課を代表して僕が来たんだ」

ふうん、金沢の人か。それなら俺の知らないはずだ。

「ダイチ、あれ」

ガチャギリが声をかけた。その指差した方向にフミエがいる。普段は着ることのない黒とグレイの服に身を包んだフミエも、意外と新鮮でかわいい。

と思っただのを顔に出さないようにしながら俺は言った。

「あのヤロー、最近ますます凶暴になりやがった。何とかしねーと」

「デンプアから聞いたつすよ。またメガネ壊されたって」

「または余計だ」

「でも放つといたらあいつ、つけあがるぜ」

ガチャギリがこつちに鋭い視線をくれた。

「お通夜の後、1戦交えるか」

「いくらなんでも今日は日が悪いだろ。次に見かけたらにしようぜ。それよりな、俺、今すんげえ計画を考えてんだ。お前たちも乗らな

いか」

「すげえ計画？」

ガチャギリとナメツチは顔を見合わせる。

「ああ、実はな」

と俺が話しかけたところでカンナの家が見えてきた。

「悪い。後でメールかなんか送つとく」

俺たちは弔問の列を指して歩みを速めた。

列の後ろに並ぶと、4、5人前にハラケンの後ろ姿があった。

「ハラケン」

小さく呼ぶと、振り返ったハラケンはちょっと頭を下げるようにして、俺たちのところにやってきた。

「ハラケン、カンナのこと、残念だったな」

珍しくガチャギリがハラケンを思いやるような口調で言った。

「それにしても、あいつなんで中津交差点なんかに行つたんだろうな」

「えっ！？ カンナが事故に遭つたのって、中津交差点なのか」

ガチャギリの言葉に驚いて、俺は思わず声を上げた。ナメツチが不思議そうに振り返る。

「そうっすよ。緊急連絡網で回つてたじゃないすか」

そうだったのか。カンナが事故に巻き込まれたってことだけでびっくりして、俺は余り事情を確認していなかった。

「それじゃ、カンナはイリーガルを探しに行つて……」

「そうかもしれない」

ハラケンは頷いた。

なんてこつた、俺のミスだ。俺はがばつと頭を下げた。

「すまんハラケン、俺の責任だ。俺があんなこと言つたばかりに」

「ちつ、違うよ、ダイチは助言してくれたただだし、僕はそれに納得したからこそカンナに1人で行けつて言つたんだ」

「いや、確かに俺にも責任がある。悪かった」

言い募ると、ハラケンは顔を歪めた。

「そう思うのなら、僕じゃなくてカンナに謝ったほうがいい」

「カンナに……」

その答えで、俺の中でようやく何かがしっくり行った。

俺はこの後カンナに謝るだろう。でも、カンナの答えはない。それで、俺は初めてカンナがいなくていいってことがわかるんだ。そうなることが、本当にカンナに別れを告げることになる。今日、俺はそのためにここに来たんだ。

人波の前のほうに見える白木の祭壇に目をやった時、列が動き始めた。

カンナの家は前庭が結構大きかったから、そこに面した応接間に応急の祭壇を作って庭に甲問客が並んだ。予定の午後6時を少し遅れてお通夜は始まり、子供が多いせいか読経は短めに済ませて焼香となった。

お盆中だから父母の実家にて参列できないクラスメイトも多かったと思うけど、それでも僕たちの焼香の順が訪れる頃には山際に陽がすっかり隠れ、陽光の名残りかそれとも祭壇と前庭のそちこちにしつらえた燈明の光かはつきりとしない、柔らかで弱い光が僕たちをぼんやりと照らしだしていた。

お焼香の列は2つに分かれ、僕はダイチと並び、その後ろにガチヤギリとナメツチが続いた。離れてみると荘厳な雰囲気だった祭壇は、しかし近付くと粗い細工と電飾の組み合わせなのがかかって、僕はなんとなくやるせなさを覚えた。

昨日カンナの棺の前で散々泣いたのと、その後で1つの決心を固めたので、今日は涙が出ないかもしれないと思っていたのだけけれど、顔の見えない棺の前に立つと改めてその中にいるカンナと僕たちの取り返しのつかない距離が意識されて、それはやっぱり涙になつてこぼれ落ちた。

カンナ、いつかきつともう1度会えるから。その時まで、お別れだ。慣れない焼香の手順を見よう見まねで追いながら、僕は心で語りかけていた。

焼香をすませ、カンナの写真をしっかりと目に焼き付けた後でふと隣を見ると、ダイチも涙を流していた。驚いたことに、僕たちの後で焼香に立ったガチャギリとナメツチ、それに後から来たデンパまで涙ぐんでいる。多分このお通夜に出た子供の大半が泣いていたんじゃないかと思う。

学校が始まった後で聞いてみたら、4人とも、カンナが死んだって頭ではわかってても、心では納得できていなかった、って言うていた。それが、お通夜の席で急に実感として伝わってきたんだと。

たくさんの人が1人のために集まって、1人のために泣いているのに、その1人は決して現れない、それでそこに空いた穴の大きさに4人は気づいたんだ。

皆が泣いてくれることはカンナを送るためにはとてもいいことだったのかもしれない。事実、おばさん　カンナのお母さんは焼香の後で行った短めのあいさつの中でそう語っていた。

でも僕には、そうやって泣いて、それを儀式にしてしまうことでカンナの死を皆と一緒に納得したふりをして、過去の想い出の中に封印してしまおうとしているようにも感じられた。だから自分の焼香がすんだ後、僕はどうしようもない閉塞感に襲われて、誰に話しかけられても何も答えずただうつむいていた。

皆はそれが僕の悲しみのせいだと思ったのだろう、返事をしなくても怒ったりせず、逆に気遣うような表情を浮かべて去っていった。でも、その時僕が感じていた閉塞はもつともつと子供じみた、独占欲に近いものだったかもしれない。

僕はカンナと離れたくなかったんだ。

「最後に、ご希望の方があればカンナの顔を見て頂きたいと思いません。顔には傷がありませんでした。とてもきれいな顔です」
母親のその言葉に立ち上がった会葬者は多くはなかった。中には立ち上がりかけて保護者に止められる子もあつた。

顔に傷はないとは言われたもののやはり交通事故であるということから憚るものがあつたか、それとも単に生命のない人間の体というものを見るだけの勇気がなかつたか。いずれにしても、葦原かなというその少女を、この場所を包み込んでいる穏やかな光でぬくもつた想い出の中に収めておきたいと感じた者にとっては、その選択は正しかつたらう。

逆に言えば、その時立ち上がった何人かの子供の胸の内にはそれ以上の感情が秘められていたのだ。橋本文恵、沢口ダイチ、原川研一の3人がその中に含まれていたのは言うまでもない。

どういふ偶然か、3人は並んで祭壇の前に立つた。手際のいい葬儀社の人間によつて、短い時間の間に棺の上蓋が取り払われていた。顔の周りは花で埋め尽くされ、その中には昨日原川研一が手向けたものも含まれていた。白い小さな花はそれ1輪だけでは何とも頼りなく薄汚れて見えたのに、多くの同胞に囲まれると小さいながらに己を主張して、しおれもせずその愛らしさを際立たせた。

花々の中心にある葦原かなの顔がどのようなものであつたか、それを見てどう感じたか、そう3人に聞けば、まさに三者三様の答えが返つて来るだろう。微笑を帯びたその表情をまるで生きているみたいだと思つた者もあれば、その表情が全く動かないことに強く死を意識した者もあつた。彼女と自分の永遠の別れが既に終わっていることに今更ながらに動揺を覚えた者も、これまで共に過ごしてくれたことへの感謝を抱いた者もあつた。

ただ3人が共通して抱いたのは、それは葦原かなの顔が美しかったという記憶と、もう1つは彼女に対する謝罪の気持ちだった。

強く真つ直ぐなその思いは私のところまで届いて、私はそれを
言祝いだ。

それはもちろん、ここでたゆたっていたある意識の残照にも朽ち
ることなく届いた。

私はそれに微笑みを向ける。

あなたも私の愛する子のひとり。あなたはここでまどろんでいな
さい。いつかあなたを思い出す者が無くなって、深淵に還るその日
まで。あるいはそうなる前にあなたを迎えるものが現れる日まで。
どちらが先に訪れるのか、だがそれはまだ先の話だ。

あくる日の昼過ぎ、この上ないまでに青く晴れ渡った空に細くて
白い煙が1条上がって、カンナは花と共に蒼穹に消えていった。

終章 子供の語ること

新しいスポンサーに現状を簡潔にメールで伝えると、僕は椅子から立ち上がり窓の外を眺めた。朝のすがすがしい光が部屋に射しこんでいたが、僕の心は重く濁っていた。

今日で事故から3日目になる。メガマスの内部では陰湿な権力闘争が起こりかけているらしかったが、末端の僕には多くの情報は入ってこない。その一方でこちらと言えば、3日前からまるで変わらない状況が続いていた。

勇子は部屋から出ないどころか、ベッドからさえほとんど起き上がらない。時折様子を見に行つて声をかけると、重い緞帳のような布団の向こうから「うん」とか「ああ」とか声が聞こえるものの、生返事なのは明らかだった。

これまで巡らせてきた緊張の糸がぷつりと途切れて、勇子は変わってしまった。

いや、あるいはこの姿が勇子の本質かもしれない。今まで外界との接点を自ら断ってきた勇子の、唯一の他者とのつながりは兄への愛着を通してのものだった。幼いその感情を世間的な善にまで押し広げ、兄のためになすことはそのまま誰から見ても正しいことなのだ。この子は勝手に思い込んで、それを行動原理にしてきたのだろう。今度の事故は彼女の作り上げた世間知らずな幻想を根底から破壊した。後に残ったのは、他者と関わる術をまるで持たない幼児の心だ。勇子は世界に触れるのが怖くてたまらないのだ。

最初の内僕は勇子に同情していたが、時間が経つにつれて苛立ちが募り、昨日あたりからは憎々しささえ感じるようになっていた。

計画は失敗したのだ。早く次の準備を始めなければならぬ。それなのに勇子は小さな子供に戻って自分に閉じこもったきり、下手をすればもう回復できないかもしれない。

だが、当然ながら勇子を切り捨てることなど考えられない。ならば僕の手で、どうにかして心の襞に逃げ込んだ勇子を引きずり出さねばならない。

改めてそう決心し、僕は勇子の部屋へ向かった。

ノックすると、思いがけずすぐに扉が開かれた。シャワーでも浴びたのか、中から現れた勇子の髪は少し湿り気を帯びている。

「何か用」

部屋に入った僕を、硬く感情を排した声が迎えた。

「もう気持ちは落ち着いたのか」

なんだ、一人で整理をつけてしまったのか。安心感と拍子抜けした気持ちと、それからいくらかの憎悪が僕の中に広がった。

「様子を見に来たのなら、心配する必要はないわ。他に用がないなら出ていってよ」

勇子の返事には少々むっとしたが、気にしない風を装って僕は軽口を叩いてみせた。

「連れないこと言うなよ。じゃあ何か食べに行こうか。ここしばらくルームサービスしか食べてないだろ」

そのルームサービスすら、ほんの僅かしか口をつけていないはずだ。

「いい。私、これから出かけるの」

「出かける？ 一体どこに」

「あの子のお葬式に行くの」

「何？」

僕は耳を疑った。突然何を言っているんだ、こいつは。

「馬鹿を言うな。大体、あの子の名前も住所も僕たちは知らないじゃないか」

勇子は薄く笑いを浮かべる。

「あの子の名は、葦原かな、10歳。住所は……」

僕ははっとしてメールボックスに目を走らせた。くそ、いつの間に盗み取った？

「じゃあ私行くから」

勇子は僕をすり抜けてドアに向かおうとした。

「やめろ。お前を覚えているやつにあつたらどうするんだ」

「何で？ 顔も見られてないって言ってたじゃない」

「あ、ああ、少なくとも注目はされていなかった。でも、どこで誰が見ていたかはわからない。とにかくそんな目立つことはするな」
どうしてこんな当たり前のことを言わなくちゃいけないんだ。僕は腹が立ってきた。

「見つかつても構わない」

勇子の口調には少しブレがある。昂ぶる感情を押し殺している証拠だ。

「駄目だ！ 捕まるぞ！」

僕が強く言つと、

「捕まったつていいよ！」

ようやく、勇子はそこで崩れた。

ぎゅっと握られたこぶしがぶるぶる震えている。涙が溢れて次から次へと頬を伝った。

「だって私のせいだもの。私が扉さえ開かなければ……あんなことには」

僕はその場に立つたままだった。

僕は驚いていたのだ。勇子にはない、僕にだ。泣きじゃくる勇子にまるで同情を感じていない僕自身に。ほんの数日前まで仲間意識を抱いていた勇子を、今は己のための駒としか見ていない。

いや、自分のことなどどうでもいい、とにかく勇子を懐柔しなければいけない。そう考えて勇子に声を掛けようとした僕の動きを、ふと浮かんだ考えが止めた。

忘れていた、勇子は頭のいい子だ。もしかすると僕に止めてほしくて、わざと僕が来るのを待っていたのかもしれない。そうすれば、結局は何も失わないでおきながら、罪悪感だけを都合よく誤魔化すことができるから。

本心からの後悔か、それとも単なる欺瞞か。こつやって見ていれば、化けの皮が剥かれる。僕は黙って勇子の様子を眺めた。

しばらくすると、勇子は袖でゆっくりと涙を拭いて、ドアに向かって歩き始めた。勇子の姿はこれまでに見てきたどんな時よりも頼りなげで弱々しい。そのせいか、僕の心にもやっとなる感傷が生まれた。

それでもまだ感情を行為に移すことなく、ノブに手がかかってドアがのろのろと開きかけたところで初めて僕は口を開いた。

「勇子、もうやめろ」

計算ずくで行動していたなら、ここで泣き崩れるなりして部屋を出ようとはしなかったろう。その点で僕は勇子を見直したが、一方で振り返って僕を見たその目の中にすがりつくような光が含まれているのも見逃さなかった。

「そのまま行けば、お前は満足かもしれない。だが、信彦を救うことはできなくなる」

「お兄ちゃんを？ ど、どうして？」

勇子は動揺した。ノブから手が離れ、支えを失ったドアが音を立てて閉まる。

「考えてもみる。お前が捕まるか、捕まらないまでも疑惑の目を向けられるようになったら、今まで僕を通してお前を支援してきた人々は、自分たちのことが明るみになるのを恐れてお前を巡る一切から手を引くだろう。そうしたら僕も勇子を助けることはできない」

「そんな」

本当はそんなことはない。大体イマーゴの存在自体が公式には伏せられているのだから、逮捕しようにも罪状がない。仮に怪しまれたところで、勇子のようにイマーゴを持ち、かつ稀有な電腦スキルとセンスを有して、その上にこちらの操りやすい動機まで十分な子供など他にはいないのだから、切り捨てられる可能性はほぼゼロだ。

「今の感情に流されるか、それとも信彦を助ける道を選ぶか、2つに1つだ」

だがそんな考えはおくびにも出さず、僕ははったりをかました。

勇子は打たれたように僕を見て目を見開いていたが、やがて少しずつ瞳に迷いの濁りが加わり、それを見た僕は安心した。案の定、やがて口から小さく言葉が漏れた。

「……お兄ちゃん」

それが僕に対する回答なのか、それとも単に呟いただけなのかはわからないが、勇子はうなだれたまま戸口から離れ、力なく椅子に腰かけた。

「午後にはここを出よう。準備しておけよ」
そう言い残して僕は自分の部屋に戻った。

3日3晩ベッドの中にいたというのに、私はほとんど眠っていなかった。まどろみかけるとすぐにあの事故の場面が目の前に現れて、恐ろしくてたまらなかったから。

私はずるくて汚い子供だ。葦原かんなの葬儀に出る決心が潰えたことに絶望するふりをしながら、心のどこかで安心感を覚えていたに違いない。多分そのせいだろう、宗助の車で家に帰るまでの間に、私は深い眠りに落ち込んでいった。

暗い路地に私は立っている。霧が深くて周りがよく見えないから、ここがどこなのかはよくわからない。でもそんなことはどうでもいいんだ。この路地の向こうに、これまでずっと探し続けてきたものがある。私は歩き始める。

進めば進むほどに、私は何か温かくて懐かしいものに包まれていく。ああ、ここは私を受け入れてくれる。そんな場所を、これまでどれほど求めてきただろう。

いつしかその彼方に穏やかなオレンジ色の光が灯るのを私は見出す。大切にしていたあの時のままの、光の優しさ。自然と足が速まって、私はほとんど涙ぐみながらそこを目指す。

光は次第に鍵穴の形となって揺らめく。少しでも目をそらしたらそれが永遠に失われてしまいそうで、一生懸命に見つめ続けていたその明りの中に、一瞬何か動く。真つ黒な影しか見えなかったのに、それが私の求めているものなんだとはつきりわかって、私は思わず叫びを上げて走り出す。私に答えてくれるように光が脈動しておいでおいでをしてみたいだ。

ぐんぐん近付いた夕映えの中に飛び込んだ瞬間、過去も未来も、現実も非現実も、私の心もあなたの心も、もはや垣根をなくして1つになったのがわかった。だから、私はここで、私の本当の望みをかなえることができるんだ。

目を上げると、さっきの黒い影がすぐ近くにたたずんでいた。私は駆け寄った。信じがたい幸福に全身を震わしながら、私はそれに手を伸ばす。そうして、届いた手に伝わる温かな感触を私は感じる。一緒に、帰ろう。そう私は語りかけた。相手はゆっくりと、しかし力強く頷いてくれた。嬉しくて嬉しくて、でもそれで崩れてしまわないように、私は1歩を踏み出そうとした。その時。

ぱあんという音が響いて夕映えの世界が吹き散った。急に現れた灰色の道路の向こうから、ヘッドライトが2つ、こつちを指指して進んでくる。突然のことに混乱しながらも、私たちは手をつないで走り出した。

ところが、唐突に私はおかしなことに気がついた。走っているはずなのに、私の足はまるで根が生えたように動いていない。

どういうこと？ 足元を見て、その後で顔を上げた私の目に、信じられないものが飛び込んでくる。

私。もう1人の私が、驚きの表情を浮かべて私を見つめている。そんな馬鹿な。

呆然と見つめていたもう1人の私が、はつと横に視線をそらした。吊られて私もそつちを見る。

さっきのヘッドライトが、もう目前まで迫っている。危ない！ 逃げようとするのに、足はびくともしない。ヘッドライトがぐんぐ

ん私に近付く。光が凶暴な白さとなって私を埋め尽くす。助けて！

「勇子？ 勇子！」

私は跳ね起きた。

「一体どうしたんだ？ うなされてたみたいだぞ」

宗助が私の顔を覗き込んでいる。

「大丈夫。ちよつと嫌な夢を見ただけ」

そう答えて、私は外の景色を見た。もう家の前まで着いている。

「それならいいが……。今後のことは追々僕から連絡する。それまでは休んでいる」

「うん」

車から降りかけて、私は宗助を振り返った。

「ねえ、あの時の電脳体って……」

「何？」

「いや、何でもない」

怪訝そうな宗助の顔を車内に残してドアをぱたんと閉め、私は家に向かった。

私の部屋には夕陽が入る。夏の西日は暑く、この季節には過ぎやすい部屋ではないのかもしれないのかもしれないけれど、私には嬉しかった。エアコンのスイッチを入れ、しばらく窓越しの陽を眺めてから、私はベッドに腰かけた。部屋の白い壁に茜色の陽が映えて眩しい。そのまま背をベッドに寝かせ、メガネをずり上げて腕で目を覆うと、やっと少しの平安が訪れたような気がした。

お兄ちゃん。

ごめん。今度はだめだったけど、次は必ず助け出してみせる。次は。

次は？

突然声が聞こえたような気がして、私はそっちを見た。

驚きはなかった。さっき夢を見た時から、なんとなくそうなるの

ではないかという予感がしていたから。

部屋の片隅にできた薄闇の中に人の形が現れている。

あなたには次があるのね。いいな。

「あなたは、葦原かな？」

私は声が震えないように気を付けながら、ゆっくりと訊ねた。

葦原かなと呼ばれていた子供はもういなくなってしまうたでしょう。私はその心の熾き火のようなものに過ぎないわ。

「何で私のところに。復讐しに来たの？」

いいえ。あなたが私のことを考えて、私にはあなたの前に現れる力があつたから現れた、それだけのこと。

それを聞いて胸に安堵が広がったけれど、同時にわずかな失望もあった。

むしろ復讐してほしかった？ 罪を償うために。

考えを読まれて、私はうつむいた。

あの事故があなたの責任なのかどうか私にはよくわからないけれど、私はあなたを恨んでいないわ。ちょっとうらやましいだけ。

「うらやましい？」

声は元から沈んで聞き取りづらかったが、そこでまた一段低くなつた。

ええ、私にできなくなってしまったことが、あなたにはこれからできるだろうから。

「私は……あなたのこれからを奪ってしまった」

そうね。

「……ごめんなさい」

謝ってほしいわけじゃないの。でも、もしあなたが責任を感じているのなら、してほしいことがある。

「言つて。何でもするから」

私のことはもう忘れて。

「えっ！？ どうして？」

私はむしろ逆のことを頼まれるのではないかと想像していたから、

そう言われて驚いた。

他の人々からの思いを受けて、どんどんはつきりと顕れてしま
う、私がそういうものだから。本当の私はもういないのに、皆の後
悔や悲しみや寂しさが私を生み出してしまつから。そうやってここ
に在るせいで、いつか私の大切にしてきた人達の歩みを止めてしま
うかもしれないから。

黒い電脳体の塊のようになってしまった葦原かんなの遺された心に
泣くということができるのかどうかはよくわからなかったけれど、
それでも私にはかんながそうしているように感じられた。

「あなたが望むのなら私はあなたを忘れるように努力する。でも、
努力はするけれど……もしかすると忘れられないかもしれない」
私はどう答えていいかわからなかった。だから、その時胸に浮かん
できた言葉を正直に伝えた。

かんなは、今度は微笑んだようだった。

そんな風に特別に忘れようなんて思わなくていいのよ。古い記
憶なんて放っておけば新しい感情に上書きされてだんだん消えてい
く、人の心ってそういうものよ。

私にはそんな自信がなくて、何も答えられなかった。

ああ……あなたはつい過去の側に親しんでしまつ心を持ってい
るみたいね。

小さく頷いた私に、かんなは優しく語りかける。

でも大丈夫よ、あなたと心がつながった人間は確かにいる、そ
の子がいつかあなたを助けてくれる。

ふいに、知らない女の子の姿が浮かんだ。ふいに、会ったことな
い女の子の姿が浮かんだ。今までに見た覚えもないのによく知った
ような落ち着きを感じる鳥居の並んだ石段から、私に向けて真っ直
ぐに手を差し伸べるその子の瞳の美しさに、何故だか胸が締めつけ
られた。

あなた、笑ってるととっても優しそうね。……ごめん、やっぱ
り私はあなたがうらやましいな。このまま話し続けたらちよつと嫉

妬しちゃうかもしれないから、もう消えるわ。

「待って、かな」

待てないわ。記憶は次第に朽ちる。私ももうすぐ睡りにつく、いつか私を強く思う人が私をおとなってくれる日まで。人影が散っていく。

さよなら、イサコ。

薄れるように声は消えた。引き止めるように伸ばした腕が目を外れて、夕陽がまぶたにじかに当たった眩しさで私は目を覚ました。

陽の向きが変わったせいで、カンナのいた暗がりほとんどなくなっていた。

カンナは自分のことを忘れろと言った。その言葉どおり、これから私はカンナを忘れたふりをして生きていくだろう。けれど、私の本当の心は、きっと自分を許すことができない。だから、ごめん、私の中のどこかにずっとあなたはあり続ける。

いつか、私が私自身を許せるようになったら、その時私はあなたに謝りに、そしてお別れを伝えに行こうと思う。それまで、私からさよならを言うことはできない。

髪留めを外してベッドに横になり、タオルケットを引き寄せて、私はもう少し眠ることにした。

もう眠りの中にカンナが現れることはないだろう。その代わりに、夢は何か懐かしい未来を語るかもしれない。

私は目を閉じた。降りてきたのは、もちろん闇。

でも、その向こうには、新しい朝が私を待っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3469j/>

電腦コイル プロローグ

2010年10月9日00時52分発行